

常州觀莊趙氏の歴史にみる 清代社会の一断面（8）

浅 沼 かおり

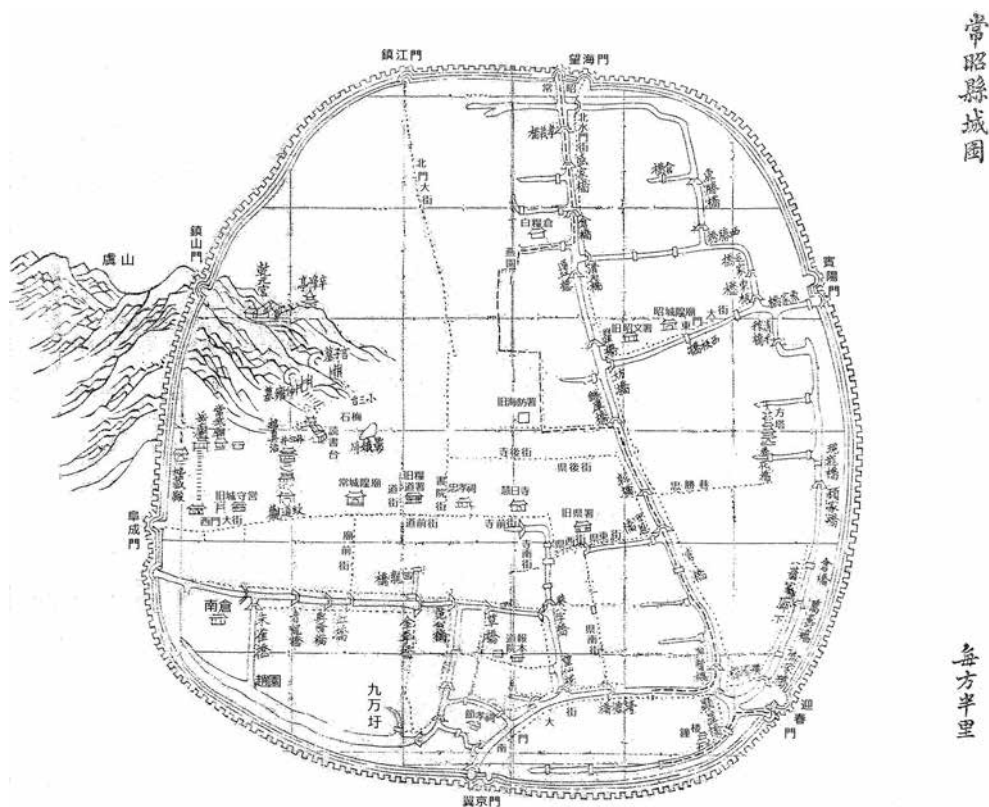


図 8-1 常昭縣城図*1

〔重修常昭合志〕（一）（据・清鄭鍾祥等修，龐鴻文等纂，清光緒三十年刊本，影印，中国方志叢書・華中地方・第153号，成文出版社）所収「常昭縣城図」より作成。

本節では第7節に引き続き、『能静居日記』*2（以下、『日記』と略記）を主な資料として、趙烈文の生涯について述べる。前節では趙烈文が直隸省での役人生活を終えて、光緒元（1875）年に江蘇省蘇州府常熟県の自宅に戻るまでを述べた。本節では彼の長い隠居生活を追いながら、郷紳生活の諸側面に光をあててみたい。『日記』の面白さは、日常の些事が丹念に書き込まれている点にあるので、煩瑣をおそれず詳細に紹介したいと思う。物やサービ

スの価格、都市間の移動にかかる時間などについても、できるだけ省略せずに記すことにする。

張仲礼氏は19世紀末の紳士の数について、「全国にはおよそ150万の紳士（gentry members）がいた。全国にはおよそ1500の州県があったので、平均すると1つの州県にはおよそ1000名の紳士がいた^{*3}」と述べている。趙烈文はそのうちの1人であった。趙烈文自身の容貌について、少しだけ叙述がある。趙烈文は同治6年に「体重をはかったところ、116斤であった」（T6/4/3.1036）。1斤を0.5キログラムとすると、58キログラムである。同治11年からは「上髭を蓄え始めた」（T11/9/25.1516）。年は取っても食欲は旺盛で、米団子を「30個も食べてしまった。若い頃とかわらない」（G9/12/27.2155）。光緒12年、かぞえて55歳になった趙烈文は、「光緒元年に官を退いてから、およそ12年間になるが、齒は丈夫、髪は黒い」（G12/1/1.2248）と嬉しそうである。当時としては、丈夫で若々しい「ご隠居」だったことだろう。

趙烈文はもともと常州府の人であるが、直隸に向かう以前に、蘇州府の常熟県に家を構えた。同治4年の曾国荃への手紙には、「はじめは貧しい借家暮らし〔梁鴻賃廡^{*4}〕のつもりだったのですが、蘇州在住の族兄が隠遁を勧めて金を出してくれましたので、途中でやめることはできなくなりました」（T4/10/29.947）と書いている。「虞山」とは図8-1にも示した常熟の山、「族兄」というのは、殿撰公分世31世・趙廷彩^{*5}である。この人が不動産購入のために、少なくとも「400緡」を貸してくれたのである（T4/9/1.933）。1緡は1000文、銀1両＝制錢1856文^{*6}とすると、400緡はおよそ銀216両にあたる。

道光元年生まれの趙廷彩は、道光12年生まれの趙烈文より一回り年長であったが、二人とも世代としては觀莊趙氏31世に属していた。二人がはじめて会ったのは咸豊11年であった（X11/2/7.272）。趙廷彩は国学生^{*7}の出身で、「国子監典籍」^{*8}に議叙されたあと、捐納を追加して知県となり〔加捐知県〕浙江省に分発された。趙廷彩が孝豊県の知県になったのは咸豊8年、彼の後任が咸豊10年に就任している^{*9}ので、知県として過ごしたのは2年ほどの期間であった。

趙廷彩は、第4、5節でふれた蘇州の繆氏に入贅した趙觀男の子孫である^{*10}。蘇州在住の觀莊趙氏は「男丁17人、^こ綉坊、醋庫巷、十全巷に3軒」（T4/2/15.871）^{*11}と、近所に集まって暮らしていた。同治5年に、趙烈文は趙廷彩に連れられて彼の「莊園に行った。虎丘の南にある。160畝の田を雇農〔傭工〕が耕して、多くの利益を生んでいる」（T5/3/6.972）。これが後年、趙烈文の隠居生活のモデルになったに違いない。趙廷彩は同治10年9月に亡くなったが、保定でそれを知った趙烈文は、「悲痛に堪えない。一族のなかで私に最も手厚くしてくれた人である。数年間おちぶれていたとき、ずいぶんと助けてもらった。まだ全くお返しをしていないのに突然永別となり、今生にまた一つ痛恨事が増えた」（T10/11/7.1456）と悲嘆に暮れた。

さて、趙烈文は、まず土地を探さなければならなかった。「連日物件探しに駆け回り、腰

が折れそうである。幼いときは、家がある「蒙業」のは当然と思っていたが、いま艱難辛苦のなかを漂って、営巢の苦勞を知り、大きな溜息をつく」(T4/8/21.929)。高価な不動産には手が出ない。「蘇州城や木瀆(蘇州府呉県の鎮、引用者)で土地を選んで家を建てるのは容易ではない」(T4/8/2.925)。「太湖の東洞庭山(蘇州府太湖庁治下の洞庭東山、引用者)に、(中略)千緡で大きな屋敷が買えるという。私もその山水は好きだが、僻地なのに要路[衝]であるので、虞山のほうにしようと思う」(T4/8/20.929)。手頃な物件を探すのに、趙烈文はずいぶん苦勞している。

やがて目にとまったのが、常熟城内の九万圩であった。図8-1が示すように、城の南西部に位置している。「水に面しており、西山が翼を上げたようで、城内にこれほどの景勝の地はない。荒れた土地が一面に広がり、南に一つ大池があり、老人がそこで釣りをしていた。所有者は何姓かと聞くと、もとは呉氏の芷園だったが、没落して、ちょうど売り主[售主](買い主の誤りか、引用者)を捜しているという」(T4/8/20.929)。そこは、明代に築かれた「小輞川」とよばれる園林の跡地であった^{*12}。清代の嘉慶年間に呉人・呉峻基が拓いて「水園」とし、竹を植え、魚を飼ったが、咸豊10(1860)年に破壊された^{*13}というから、太平天国による被害であろう。趙烈文はさっそく、「三万暢茗樓」という茶樓で、兄・趙熙文の妻・馮氏の兄である馮宝訓(字・式之)(T4/2/20.874)とともに、呉園の地主である呉宝書に会った。

土地と池をあわせて約4-5畝、百数十緡ほしいという。私は100緡でどうだといった。呉はおい[侄]に相談したいと言って帰った。(中略)呉宝書が人を寄こして、おいに訊いたところ、100緡で売りたいと言っているという(T4/8/23.931)。

100緡は先述のレートではおよそ銀54両である。当時の不動産取引の様子がわかって興味深いので、以下に契約の場面をやや長く引用してみたい。文中の「安林」は「薛安林」という人で、彼については、「蘇友薛安林」(T4/2/14.870)、つまり「蘇州の友人」としか説明がないが、米屋を開いたりしている(G13/2/20.2296)ので蘇州の商人であろう。家探しのほかにも、妾選びや商売の指南など、さまざまな世事において趙烈文に手を貸している。薛安林に、

みんなを三万暢に集めてもらおう。私はさきに楊書城^{*14}を訪ねたが、蘇州に出かけて留守だという。次に趙少琴^{*15}を訪ねて、盟主[主盟]になってくれるよう頼むと快諾してくれただけでなく、呉姓の子弟の多くは不肖だが、儒卿という号の者だけはちゃんとしている[行己表表]なので、これにも知らせた方がいいと言う。一緒に儒卿のところに行くと、不動産は呉宝書とそのおい[侄]である善培(号・砥齋)の共有であり、2人の名前がないとだめだということがわかった。さらに宝書には寡婦の^{あによめ}嫂(堂名は光

霽)がおり、彼女にも少し持ち分があるという。儒脚は仲介人〔作中〕になることを承諾してくれた。別れてから、周滋亭^{*16}の家に行った。式之と安林はすでに茶店〔茗肆〕に皆を集めてくれており、しばらくしたら来るという。周のところで契約することにした。最初に名を連ねるのは、馮式之と席衡齋(呉園の隣人)、屈雲門(呉宝書の姉の夫)、呉蘭溪(宝書の伯父)の4人である。宝書のおいである善培も来た。署名しようとしたところ、この土地にはまだ王姓、楊姓、錢姓、席姓の抵当があり、さらに県の翁氏と曾氏がこの土地を買いたがっていたという。一つ一つ始末をつけて、各姓から抵当権設定証書を請け出してくれるよう宝書に頼んだ。そして、翁氏のところに向かい、買うのかどうか確かめた。日暮れどきになってから〔比下春〕、諸事をすべてはっきりさせてから契約した。もとの持ち主と、立会人〔中見〕の呉蘭溪、席衡齋らに土地の三面を測ってもらい、図を作成して契約書に付けた。初鼓(19-21時頃、引用者)後に終わり、質素な席を設けて諸客をもてなし、二鼓(21-23時頃、引用者)に解散した(T4/8/25.931)。

薛安林は普請の手伝いもしてくれて、建材についても、「ある家が売値300緡〔三百千〕なのだが、あらかじめその材木を売るそうだ。家の半分になるだろう」(T4/8/27.932)と教えてくれた。そこで「その家の材木を撤去して園に運ぶ。(中略)図面などはすべて安林にまかせる」ことにした。材木の値が280緡、仲介料などが約20緡であった(T4/9/1.933)。300緡は、先述のレートを適用すれば、およそ銀162両に相当する。

同治4年12月3日、趙烈文は鄧夫人とともに新居に入った(T4/12/3.955)。『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』(以下、『年譜』と略記)には、「九万坪の呉氏の土地、約4-5畝を買う。値は100緡。職人に前楼5部屋〔楹〕、平屋4部屋を作らせた。のちに平屋5部屋を建て、四姉の家族を住ませた」^{*17}と記されている。「池のほとりに桃を6株、家の西に桐を8本植えた」(T4/12/9.956)、「柳を植え終える。池のまわりに大小160株である」(T5/1/18.962)と、趙烈文は新居の植栽を楽しんでいるが、屋敷が本格的に整備されるのは、光緒元年に引退生活を始めた後のことになる。

上述のように増築して共に暮らした「四姉」^{*18}について、少しだけふれておきたい。趙烈文の姉たちは、兄弟姉妹の長幼の順で呼ばれている。一姉と二姉は父・趙仁基の最初の妻・高氏の娘であり、一姉は夭折し、二姉は李嶽生という人物に嫁いでいた。『日記』を読むかぎり、趙烈文は二姉とは、四姉や六姉ほど親しい間柄ではない^{*19}。四姉は趙仁基の二番目の妻である錢氏の娘で、周騰虎^{*20}に嫁した。錢氏にはもう一人娘がいたが、若死にした。三番目の妻が趙烈文の母・方氏である。「前妻はそれぞれ一人ずつ娘を遣したが、(方氏は、引用者)自分の娘のようにかわいがって育て、十分に嫁入り道具をそろえてやった。前妻の娘は、母を亡くして母を得たと言っていた」^{*21}というが、「母を得た」と感謝していたのは四姉ではないだろうか。六姉は趙烈文と同じく方氏の産んだ子である。気丈な女性であった

ようで、常州の十子街の旧宅に大きな家を新築したとき、「自分で工事を監督し、職人たちを指揮していた」のを目にした趙烈文は、「男子にはるかに勝っている」(T6/12/16.1138)と感心している。

夫の周騰虎が同治元年7月に痲疾で急逝した(T1/8/10.568)あとは、趙烈文が、寡婦となった四姉の世話をしたのである。光緒元年、趙烈文が北方から常熟に戻ってきたとき、四姉は虫の息だったが、臨終には間に合った。7年ぶりですごたら、「こんな面会になるとは。思わず涙が雨のように流れる。(中略)夜、四姉のところに行く、私の手をとって、なお、どうして掌が熱いのと訊く。もともとそうなんだと答える」(G1/10/25.1723-1724)と『日記』の記述は哀切である。その2日後に四姉は亡くなった(G1/10/26.1724)。

常熟県は蘇州府に属する県の一つである。ここで、図8-1が「常熟」県城図ではなく、「常昭」県城図である理由についてふれておきたい。第4節で述べたように、雍正2年に常熟県を分けて昭文県が置かれ、どちらの役所も常熟城に置かれることになった^{*22}。実際に昭文県が置かれた〔劃県〕のは雍正4年であり^{*23}、それ以後、この城には両県の知県が駐在していた。

光緒帝の師として知られる翁同龢も常熟の人で、翁氏の家は図8-1の書院街のあたりにあった。前節でふれたように、趙烈文は易州知州時代に翁同龢と知り合っている。翁同龢は能書家として知られており^{*24}、趙烈文は屋敷の「能静居」という額を書いてもらった^{*25}。趙烈文は2度、翁家を叩門している。1度目は翁同龢の兄・翁同爵^{*26}が亡くなったときで、「弟の叔平侍郎(同和、易州で知り合った)を訪ねて、長く話す」(G3/9/27.1824-1825)と『日記』に記されている。2度目は、翁同龢のおい〔侄〕・翁曾源^{*27}の葬儀である(G13/8/26.2320)^{*28}。

同じ江蘇省に属するとはいえ、常熟は常州と習慣を異にする点もあり^{*29}、特に趙烈文が戸惑ったのは葬式の流儀であった。「悲しくて泣きそうになるが、常熟の習俗では、男子が葬式で哭泣すると笑い話にされる。昔、楊濠叟が亡くなったとき、私は帷をからげて慟哭したが、注目〔指目〕しない者はなかった^{*30}。郷に入っては郷にしたがえ、である。涙をこらえざるをえない」(G12/10/8.2281)。楊沂孫(字・詠春、号・濠叟)は常熟の人、道光23年の挙人で安徽省鳳陽府知府をつとめ、書家として知られていた^{*31}。趙烈文の一族とは姻戚関係にあったようである^{*32}。趙烈文の屋敷の「天放楼」の門額の字は楊沂孫に書いてもらった^{*33}。彼が70歳で世を去ったとき、趙烈文は「北方から帰り虞山に住んで7年になるが、ともに語るができるのは一人だけだった。(中略)自分の寂しい暮らしを思って、溜息をつく」(G7/8/5.2038)と書いている。

上の感慨からもわかるとおり、常熟では田舎暮らしの感が否めない。趙烈文はたびたび蘇州城に出かけている。常熟-蘇州間は舟で移動し、所要時間は一定しないが、だいたい8-10時間^{*34}とあってよいのではないだろうか。蘇州から常熟にもどる道すがら、趙烈文は時計^{*35}で時間を計ってみたことがある。前夜は蘇州城齊門外の馬路橋に停泊し、「黎明に」出航

し、午後「4時に常熟に着いた」が、この日は「風がなく、舟はおなじ速度で進んだ。だいたい毎刻2里あまりであった」(G14/11/3-4.2373)。1里を0.5キロメートル、1刻を15分とすると、舟は時速4キロメートルで進んだことになる。ちょうど徒歩と同じくらいの速度である。

第2節で述べたように、蘇州は咸豊10(1860)年に太平天国の手に落ち、同治2(1863)年に奪回された。ベンジャミン・エルマン氏は、「1860年の蘇州における太平天国軍の略奪行為による死者はおよそ50万にもものぼった」*³⁶と述べている。同治4年に蘇州を訪れた趙烈文は、「閭門を発って葑門に行く。途中で南濠の旧街に建物を建てているのをたくさん見かけたが、あれほどの街並みを復興するには100年かかるであろう」(T4/8/3.925)と記していた。直隸から戻り、蘇州の「劇場[戲園]に行つて劇を見る。音曲[音声]を遠ざかつてすでに8年あまりになるが、このにぎやかさは太平と異ならず、嬉しくなった」(G5/4/20.1924)。

しかし太平天国の恐怖は、江南の人々の心から簡単には消えなかった。『日記』から、その記録を拾ってみると、「蘇州府に属する土地の多くに毛が生えた。人の毛のようである。私は咸豊の初めにこれを見たことがある。比較的大きい。戦乱の兆しである」(G6/5/8.1967)、「常州[毗陵]の西門で銭店*³⁷に強盗が入つた。教匪が拳兵したと誤つて伝えられ、城全体のほとんど半分が避難したという」(G9/4/11.2125)。「教匪」とは太平天国のことである。あるいは、

郷村で、夜、黒いものが出て人を圧死させるという流言がある。ドラの音だけは恐れるというので、一時はドラの値が一つ数千文にまで上がった。城内も郷村も沸き立ち、夜を徹してドラを鳴らし、叫び声が絶えない。また連日金星[太白]が昼間に見える。おかしい現象[乱象]が重なり、咸豊元年と同じである(G2/7/2.1758)。

光緒2年の相場で銀1両が制錢1705文に相当した*³⁸とすると、ドラの価格の数千文はおよそ3-4両である。洪秀全が広西省桂平県金田村で蜂起したのが道光30年12月10日(1851年1月11日)、その翌年が咸豊元年である。

さて、光緒元年に常熟で隠居生活を始めたあと、庭園が趙烈文の生きがいとなった。蘇州・山塘街の花屋で「松柏の盆栽」を買つたり(G2/1/20.1736)、「易州から持ち帰つた柏」を植えようと無錫で「大紫沙盆」を手に入れたり(G2/2/22.1741)して楽しんでいる。「私がこの手で植えたクルミはすでに10年あまりたつて、今年はたくさん実をつけた」(G2/閏5/17.1753)、「白沙枇杷4株を植えた。遅くとも来年は食べられよう」(G3/10/30.1834)、「園の新ソラマメを食べた。市にあったが、1斤90文する。たらふく食べられて金もかからない。栽培[種芸]はこんなによいものである」(G3/3/16.1799)などと書かれているように、収穫も豊かだった。

屋敷はひとまず光緒6年に整い、「これがあれば老後を娛しむに足る」(G6/2/1.1957)と趙烈文は喜んだ。虞山に登って屋敷を眺め、「ここに住んで16年、ついに名勝となった。土地の幸いであり、人の幸いでもある」(G6/2/14.1958)と目を細める。常熟にも庭園は多かった*39。「燕園」(図8-1の南北の中央線上、やや北よりにある)も常熟の名園である*40。趙園の隣には、同じく小輞川の跡地に建てられた曾園があった*41。面積は約20畝、光緒9年に着工され、光緒20年に落成した*42。園主の曾之撰は光緒元年に拳人となり、刑部郎中をつとめた。まもなく宦海の濁流に飽いて退職し、故郷常熟に帰って園を築き、閑居して息子・曾樸に学問を教えた。のちに曾樸がこの園で書いたのが、四大譴責小説の一つと称される『孽海花』である*43。

「堂楼・房室・亭榭が80間あまり、北楼の上下が18間」、鄧夫人と趙烈文は北楼下の西房、実夫妻と孫たちは東房、妾の馮姫は西楼に住むことになった(G6/4/23.1966)。「南陽君(趙烈文は鄧夫人を南陽君と呼んでいる、引用者)が私に嫁して34年、息子・孫・娘・嫁が12人。(中略)この亭で10年ごとの祝いをあと2、3度できたら、人の幸福これに過ぎるものはない」(G6/6/9.1971)と感慨もひとしおである。「代々の先祖が九死に一生を得て苦勞しながら読書と財産[恒業]を守ったので、子孫の今日があり、縉紳に列している」(G8/1/1.2057)と、太原公・趙鳳詔の刑死以来の苦難に耐えた先祖たちに感謝している。

ここで趙烈文の生計について考えてみたい*44。張仲礼氏によれば、「多くの紳士は、故郷での紳士服務(gentry services)、あるいは教育(teaching)、あるいはその両方を提供することによって収入を得ていた」*45。紳士服務(gentry functions)によって得られる二大収入は、聘用費と経理収入であった。「聘用費」は紛争を裁断し、訴訟事件を調停することによって得られた。「経理収入」は、紳士が郷(local)・省あるいは宗族の仕事进行处理するところから生じた。地方の仕事には、交通・防衛・治水などの公共工事、あるいは教育・宗教・娯楽事業などがあった。一方、宗族の仕事には、宗祠、祭田、族墓、義田、宗譜編纂などがあった*46。

張宏傑氏は、曾国藩の弟・曾国潢の事例を紹介している。曾国潢は「郷紳の集[斂]財能力を極限まで發揮した」のであり、「ほしいままに訴訟を独占[包攬]した」*47。知県は「訴状と稟呈を受け取ると、ふつう簡潔なコメント[批詞]を書いて地方に渡し[批付]、双方の調停を促した。この種の調停のなかで、郷紳はふつう主役の役割を果たした」のであり、調停がうまくいくと、相当な謝礼を得たのである*48。曾国藩は何度も手紙を書いて、地方の事にあまり干渉するなと言ったが、曾国潢はきかなかつた*49。曾国潢は大小の事件から、1年間に「だいたい500-1000両を得ていた」*50というのが張宏傑氏の推算である。

趙烈文は、曾国潢のように「聘用費」を集めたりはしなかつた。師・曾国藩の教えに加えて、易州知州時代に訴訟に関与する陵員たちに手を焼いた記憶のためもあっただろう。遠縁の女性から、亡夫が同郷人に貸した錢千緡を返済してもらえず訴訟になったので、「武進知県の金君に手紙を書いてほしい」と頼まれたときも、「官事に関与するのは隠居[家居]の

すべきことでないので断った」(G12/5/20.2265)。『日記』に地方・宗族からの「経理収入」についての記述はなく、おそらくこれらもなかった^{*51}。教育を生業ともしていない。では、趙烈文はどうやって生活を支えていたのだろうか。前節に登場した黄彭年への手紙には次のように書かれている。

田が2頃あり、街には店〔塵〕が数軒あって毎月の賃貸料が50緡あまりです。家族は多く、助けを求める者も多くて、しばしば不足します。売却を急がずに朝夕を過ごしていますが、長くは続かないでしょう (G2/9/9.1768)。

1頃(約6.6ヘクタール)は100畝なので、2頃は200畝である。馮爾康氏によれば、「南方では、数百畝以上の田畑〔田地〕をもつ人は大地主、100-200畝は中地主、数十畝は小地主」であった^{*52}。光緒5年の『日記』によれば、小作料〔田租〕のうち80石が家族の食用〔粥米〕(G5/12/28.1953)、それを除いた小作料が130石(G5/12/29.1953)だったので、この年の小作料は210石^{*53}であった。賃貸料についていえば、先述の光緒2年の相場(銀1両=制錢1705文)によれば、50緡(50000文)は銀30両足らずである。光緒8年正月、「祠堂から園まで蠟燭64を立ててみたが、すかすかである。本当は200は必要である。夜、南陽君と眺めて、書生の贅沢〔書生之豪〕はほどほどであると笑った」(G8/1/1.2057)。豪勢な暮らしぶりではなかった。

「常州觀莊趙氏支譜」(以下、「支譜」と略記)によれば、趙烈文には少なくとも四男四女がいたが、妾の生んだ娘についての記述が曖昧であること、光緒2年の「支譜」完成後の変化も存在することから、子女の正確な数はわからない。女子については、鄧夫人の産んだ3人の娘のほかに、馮氏が光緒5年に生んだ穠^{じょう}、同じく馮氏が光緒8年に生んだ娘がいたことはわかる。光緒8年生まれの娘の名は、おそらく「婉」である(G8/3/21.2066, G8/4/3.2068)。

長男(輩行1)の実(もとの名は克昌、字・君堅)は道光30(1850)年生まれである。同治7年に第5位で生員となっている^{*54}。彼の妻は、趙烈文の六姉とその夫・陳鍾英(字・槐亭)^{*55}のあいだに生まれた娘・陳德音である。六姉夫妻に趙烈文が贈った「結納は金簪1、玉佩1。佩は方淑人(趙烈文の母、引用者)のもの」(T2/10/27.701)であった。この結婚は「入贅」^{*56}という形をとった(T8/2/13.1239)。趙実は杭州に向けて出発し(T8/3/6.1243)、3月16日に結婚(T8/3/26.1245)、4月11日に常熟に着き、翌日、趙烈文夫婦に挨拶をした(T8/4/11-12.1247)。杭州で結婚したのは「入贅婚」だったためであろう。

趙実は、『日記』を見る限り、郷試に合格することはできなかった^{*57}。光緒5年、趙実は保定に行った。李鴻章が畿輔志局に招いてくれたのである(G12/11/9.2286)。「別れはさびしいが、息子はすでに壮年であり、家を守株させ些事ばかりさせるのは、かわいそうである」(G5/4/13.1923)と趙烈文は送り出した。光緒10年には「長らく便りがなく、吐血した

と聞いた」ので、「実兄に16字の手紙」を書いて、電報で送った (G10/2/26.2163)。趙実からも「電報10字」で「心配ない、4月には帰れる」という返事がきた (G10/3/19.2165)。電報については、天津-上海陸線が正式に開通 [通報] したのは1881年12月^{*58}、1881年は光緒7年であるから、趙烈文たちは最新の通信手段を利用したことになる。

次男 (輩行5) の寛 (字・君閔) は同治2 (1863) 年生まれである。光緒10年に第11位で生員となり (G10/閏5/14.2180)、光緒12年の時点では「附生」であった (G12/11/9.2286)。彼も拳人にはなれなかったようである^{*59}。寛は、鄧夫人の一族の鄧公武^{*60}の娘 (G5/5/4.1925) と光緒8年2月22日に常熟で結婚した (G8/2/22.2062)。三男 (輩行6) の路^{*61} は同治6 (1867) 年に生まれ、光緒元 (1875) 年に亡くなった (T6/1/5.1022, G1/4/10.1654)^{*62}。光緒元年に妾の陸氏が生んだ四男 (輩行不明) の遂初は、生後まもなく夭逝している (G1/2/6.1644, G1/3/22.1651)。

光緒12年、二人の息子の将来に不安を覚えた趙烈文は、曾国藩の長男・曾紀沢^{*63}に次のような手紙を書いて、息子たちのことを頼んでいる。

官を辞して12年になります。家の状況はすでに言を待ちません。(中略) 2人は素質は平凡ですが、清廉謹直で間違いはありません。ただ実はすでに30歳を越えており、処世の道 [径路] には習熟しておらず、坐食もまた長くは続きません。身の程知らずに、お力添え [後車] をお願いし、ご指導を賜りたく存じます (G12/11/9.2286)。

長女の柔は咸豊元 (1851) 年、次女・荘は咸豊4 (1854) 年に生まれた^{*64}。三女の苕生は咸豊10 (1860) 年に生まれ (X10/4/18.143)、同治元 (1862) 年に亡くなっている (T1/閏8/26.576)^{*65}。苕生は太平天国の戦火から逃れる舟の上で生まれた。そのとき一緒にいた趙烈文の六姉は、夫の陳鍾英がどうしても杭州に行くというので、「別れに際して泣き、今年生まれた息子の三奇 (陳範, 引用者) の嫁に、昨日生まれた娘をほしいという」 (X10/4/19.143) ので、婚約した。苕生が亡くなると、陳鍾英から結納の銀1錠^{*66}と金簪1本が送り返されてきた (T2/2/5.627)。

前節で述べたように、長女の柔は同治11年3月18日に方愴 (字・子謹)^{*67}と入贅婚をした (T11/3/4.1487, T11/3/18.1490)。次女・荘の夫となった方恒 (字・子永) は、方愴の弟である (T10/3/10.1400)。荘と方恒が結婚したのは光緒元年4月22日、趙烈文は「次婚の子永は才能ゆたかで温厚である [才甚温茂]、良かった良かった」 (G1/5/15.1661) と安心している。方恒・荘夫妻は常熟の報本街に新居を構えた (G1/10/26.1724)^{*68}。図8-1の翼京門の少し北に「報本道院」があるが、その近くであろう。

光緒5年、趙烈文は元旦の占い^{*69}をやめた。「10年あまり、年初の占いを欠かしたことはなかったが、去年の占いは全然当たらなかった」 (G5/1/1.1906) からである。前年の正月にはおめでたい卦が出た (G4/1/1.1845)^{*70} のに、その年の秋に長女・柔が自殺してしまっ

たのである。前節でふれたように、方愴は光緒2年の順天郷試に備えるため、南に帰る趙烈文と別れて北方に残った^{*71}。光緒3年10月に一度常熟に戻り（G3/10/27.1834）、翌光緒4年2月、ふたたび直隸に向かった（G4/2/20.1853, G4/2/21.1855）。ところが、保定の志局^{*72}に到着したあと発疹チフスにかかって3月26日に亡くなってしまったのである。方愴は30歳、柔は28歳であった。身重の柔に知らせるのは憚られたが、隠しておくわけにもいかなかった（G4/4/20.1874）。柔は母の傍に寝て、一晚中泣いていた。趙烈文も夜通し泣いた。「人の世の声で、聞くに堪えないものは寡婦の泣き声である」（G4/4/21.1875）。

柔は5月5日に服薬自殺を図ったが、趙烈文の手紙（G4/5/5.1876-1878）を読んで少し落ち着いたように見えた（G4/5/7.1878）。「かんざしと腕輪を洋銀^{*73}24元にかえて、子謹（方愴の字、引用者）のために経を刻んで欲しい」（G4/5/9.1878）と柔は願った。5月に趙烈文の家に移ってきた柔（G4/8/11.1887）は、8月末に「遺腹の女兒を産んだ。外孫の長綬^{*74}は虚弱なので、みんな次男を望んでいたのに、不幸にも生まれたのは女子であった。面影を偲んで〔悼影〕顔を見合わせていたが、柔女は平然としている。もともと夫に殉じる志がはなはだ切であったが、ますます気持ちを変えさせる〔挽〕ことはできないと知り、家人はとても案じている」（G4/8/27.1888）。柔は9月5日未明、少し用心が弛んだ隙に、後〔後進〕の空き家に入り、梁に首をつって死んでしまった（G4/9/5.1889）。

当時、亡夫に殉ずることは表彰の対象であった。その日の「午後、常熟の紳士〔搢紳〕がやって来て、非常な節烈である、皆で〔合詞〕奏旌をお願いする、常熟で起きたことなので原籍〔故籍〕とは関係ないと言う」（G4/9/5.1889）^{*75}。直隸省からも表彰を願うという（G4/11/16.1901）ので、趙烈文は李鴻章に手紙を書いて礼を述べた（G4/12/19.1904）。方愴の棺は10月6日に保定を発ち（G4/10/4.1894）、同月26日に常熟に着いた（G4/10/26.1896）。柔と方愴のかりもがりの日は、「二つの棺が相次ぎ、嘆息しない者はなかった」（G4/10/28.1897）。この年の11月には、次女・荘が男子を産んだあと人事不省になって家中が慌てふためき、趙烈文は「子女の面倒で、奔走に疲れる」（G4/11/11.1900）と憔悴している。幸い、荘は事なきを得た（G4/11/12.1900）。

光緒6年末、今度は「突然、兄の訃報に接した」。11月20日に亡くなったという（G6/12/5.1995）。曾國藩の力添え^{*76}によって、趙熙文は安徽省の屯溪釐局を委されていた（G1/11/17.1727）。釐局とは、商品通過税である「釐金」を徴収する役所である。

同治12年に易州で兄を見送ってから8年になる^{*77}。毎年、屯溪に会いに行こうと思いつながら、ぐずぐずしていたら、ついに死別してしまった。（中略）7日は兄の51歳の誕生日である。この日に供物を並べて喪に服してから、葬儀〔喪次〕に行つて心を尽くすことにする（G6/12/5.1995）。

趙烈文は蘇州で、「徽州人・江春華」に、屯溪までの行き方を教えてもらった。江家は、

杭州から徽州まで各所に分店があるので、それらの店に手紙を書いて、あらかじめ舟や輿を雇って趙烈文が来るのを待つようにしてくれるという (G6/12/10.1996)。「銭塘江の河岸まで行って舟を買って屯溪に向かう」(G6/12/15.1998) ことにしたが、「値は高く、約7日間で急いでいくので、洋銀24餅」であった (G6/12/16.1999)。「餅銀」*78とは旧時の銀貨を意味する言葉である。12月24日、ようやく「屯溪に着いた。近づくにつれて涙を抑えられなくなった」(G6/12/24.2003)。

釐金局の帳房幕友〔帳房〕である汪鐸(字・寿卿、休寧人)が生前の趙熙文について話してくれた。「亡兄が徴税を管理していたこの数年間、弊害は絶え、風気は清らかであった。皖南釐金局でそれまでなかったことであった」。局の経費は錢を銀に易えることによって得られ、「市価〔市估〕では1両1600文、報値は従来1800文」であった。昨春、市価によって決算報告〔報銷〕するよう上司に命じられてからは、経費が足りなかった。他局の多くは、ひそかに商人を通じて売ることと局の費用を補っていたので、申告〔申解〕数は大いに減っていた。屯溪局だけが、従来通り行っていた。各局は「皖南牙釐総局道員・陳某」に毎年数百両〔金〕ほどの贈賄をしていたが、屯溪局だけは時節の贈り物もしなかったことで、ことごとくに掣肘された。近頃は道員が交替したが、関係〔相望〕は変わらなかった。「数年間、亡兄がいつも鬱々として楽しまなかったのは、このためだったのだ」(G6/12/25.2003-2004)。

思い起こせば、先府君(趙仁基、引用者)は道光年間中葉に贛南道で官職についていた。皇帝の命令〔旨〕にしたがってアヘン禁止に誠実に取り組んだので、関の欠損は数万にのぼった。後任は(アヘンを、引用者)解禁してうまくやったので、数ヶ月で商品が数万になった。私は易州で官職についていたとき、民事で陵員と争い、その意に阿らなかつたために、2回も弾劾された。一家の父子兄弟が犬の群れに噛まれたのであり、なんとよく似ていることだろう〔如出一轍〕。しかし、家伝の清白が汚れたことはない。今日、亡兄があの世界で父に会っても愧じることはないであろう (G6/12/25.2004)。

趙熙文が亡くなったとき、遺されたのはわずか洋銀52餅、幸い趙烈文が以前送った金が22日に届いていたので助かった。公金に欠損はないが、帰郷や生活のための費用は全く無かった。兄嫁の馮氏が言うには、数ヶ月前、亡兄は自分に万一のことがあれば、屯溪で買った字画金石などを金かねに換えて衣食を満たせと話していた (G6/12/25.2004)。趙熙文は骨董品に洋銀3800元*79あまりを費やしており、そのうち3分の1は人に贈っていたが、なお2000元あまりになりそうだった (G6/12/26.2004)。兄の家に泊まった数日間、「哀しみの声が耳について、夜も休まらない。黄山、白岳がここから近いときいた。元旦はそこに避難するつもりである」(G6/12/29.2005)。黄山と白岳は向かい合ってそびえている。

12月30日、こんどは六姉の夫である陳鍾英が亡くなったという知らせが届く (G6/12/30.2005)。陳鍾英は12月14日に浙江省寧波府鄞県の官舎で息を引き取ったのだっ

た (G7/1/17.2013, G7/1/24.2016)。六姉は趙烈文に来てもらいたいようだったが、姉の長男は「すでに仕宦して榮達しており [貴仕], 家族は安泰 [久安] である。亡兄とは情況が違うので、緊急なほうを先にする。体は一つである」(G6/12/30.2005)。六姉の長男・陳鼎は光緒2年に順天郷試に受かり (G2/9/21.1769), 光緒6年庚辰科 (1880) の会試に第二甲39名で合格し、翰林院庶吉士となっていた*⁸⁰。

親族の面倒はみるが、無理はしないのが趙烈文の良いところである。

同治の初めから今日まで、大抵は家で年越をすることができたのであり、こんなひどい状況はなかった。すでに50歳になり、負担は重く、自愛しないではいられないので、山水の間に避難することにした。午刻 (11-13時, 引用者), 輿を借りて出発した。白岳, 齊雲山に向かう (G7/1/1.2006)。

今日は私の50歳の誕生日である。(中略) 小楼に泊まる。窓を開けると目の前に香炉峰がある。体を清めてから、道士に酒を燗め麵を煮るように頼み、山に向かって手酌で楽しんで。これもまた50年間ではじめてのこと [未有之奇] である (G7/1/2.2006-2007)。

1月8日は趙熙文の法要の日 [修七] だったが, 「弔問客は一人もいない」(G7/1/8.2009)。後日, 李鴻章が「香典白銀200両」を贈ってくれた (G7/5/5.2027)。先に常熟に戻った趙烈文は兄嫁たちの家を探したが, 思うような物件は見つからなかったので, 自宅の「東南に住居2進」(G7/3/2.2021) を作り, 馮氏らを住ませた (G7/9/4.2041)。

その翌年, 光緒8年に趙烈文は上海に出かけている。9月20日の朝に舟で常熟を出発してその夜は崑山県に停泊し (G8/9/20.2097), 9月21日にはほぼ上海に着くが潮待ちで停泊し (G8/9/21.2097), 翌9月22日に上海に上陸している (G8/9/22.2097)。

当時の上海には日本人*⁸¹の姿もあった。

日本の茶店に立ち寄った。なかに入って席に着くと, 日本の女子が4人いて, 菓子 [糖糍] を客に勧めている。格子模様 [棋盤紋布] の膝まである長い着物 [領衣] を着ており, 下はスカート [裙] のようでスカートではない。足には草履 [蒲履] をはいており, 頭にはまんまるの髷を結っている。二つの山がまじわり, 赤糸を網にし, 前後からめている。髪はほさほさで, 銀花の簪が髷の横に直立している。容貌は醜くないが, 拳動は粗野であり, 中国語が話せない。ただツオ, ツオ [坐, 坐] の二文字だけを知っていて, 客をみると引っ張る。すごい力でおかしい (G8/9/23.2098)。

人力車*⁸²に乗った趙烈文は, 「実に人をもって家畜に代えるというものである」(G8/9/22.2097) と感想を記している。新し物好きの趙烈文は電灯*⁸³も見物に出かける。

「華衆会」という茶店が新しく電気灯をつけた。洋式が新しく中国に入ってきたもので、わざわざ見に行った。灯はガラス製で、部屋に掛けてあり、二本の鉄条で電気局に通じている。気がくるとひとりで燃える。光は純白で月のようだが、もっと明るい。四壁を照らすと日の出日の入りの時のようで、これまた異観である (G8/9/23.2097)。

馬車^{*84}については、

昔上海にいたころ^{*85}は、馬車は外国の有力商人が乗るものであった。いまはどこにでもあり、値もどんどん安くなっている。しかし、しょっちゅうぶつかって、馬が倒れたり人が倒れたりして、手足を折ったりする。西洋人は便利を尊び、何事も先を争い、利に走ることを善しとしている。天下の災いはすべて速さにあるのを知らない。外国の人はもとより利を重んじ死を軽んじるが、わが中国人がそれを慕うこと、蠅がなまぐさ〔膾〕に集まるようなものである。ああ、悲しむべきである (G8/10/28.2099)。

往復約7, 8里, 2人で80文, 非常に安い。以前, 中国人がはじめて馬車を真似たとき, これに乗るのは数両はかかった。利のあるところ衆があらそってこれに向かい, ついに道路は馬車だらけになった。(中略) 20銭もらえれば, 争奪戦である。中国人でぶらぶらしている者の多さ, 生活の困窮, これを見ると何度も溜息がでる (G8/10/8.2100-2101)。

音曲の世界では、京劇が盛んになっていた。「京班が流行しており、感情をこめて高らかに歌う。町の人〔市人〕はその太い大声を好み、崑曲が何物であるかほとんど知らない」(G8/10/8.2101)。清末の上海の租界の舞台では、「兩下鍋」(京劇と梆子^{*86}戯の合演)が崑曲独唱に取って代わっていたのである^{*87}。

上海を満喫した趙烈文だが、実は特別な目的があった。「今度の旅は妾を買おうとしたのである」(G8/10/12.2102)。趙烈文は生涯に多くの妾をもった。最初の妾・董婉(婉良という名だったので婉と呼んでいた)は蘇州人であった。「絹織物を家業としており、大変裕福であった。祖父と父の世代に、金を納めて〔納票〕官を得た者がいる。乱に遭って家は壊れ、父母は相次いで亡くなった。兄・某に頼っていたが、某は無頼で、妹を売って負債を支払おうとした」のである。趙烈文のところにきたとき13歳であった董婉は、同治4年に16歳の若さでこの世を去った。(T4/10/2.941)。

同治7年には李氏を納れた。「李姫はあでやかでなまめかしいが教養がない^{*88}ので、清光に乏しい」が、いっぽう正妻の「南陽君は品格が俗でなく、表情は超然たるものである。はじめて美人というのは連れ添うのが難しいと知った」(T7/11/28.1228)。李氏には阿嬭^{せん}という名が与えられた(T7/12/8.1230)。李氏は同治9年、鄧夫人らと磁州の趙烈文のもとに向

かう旅の途中で亡くなった (T9/4/5.1327)。3 番目は陸氏である。趙烈文が磁州にいたとき、薛安林が趙烈文のために連れて来た女性で、「17 歳、容貌は平凡」であった (T9/11/20.1380)。陸氏は娘を 1 人産んだが、育たなかった (T12/6/20.1556)。さらに「遂初」という男子も生まれた (G1/2/6.1644) が、こちらも先述のように夭折した (G1/3/22.1651)。陸氏は「ひねくれている [性度乖戾] ので」実家に返された (G2/7/9.1759)。4 番目に迎えたのは馮氏であった。「北方の出で非常に敏捷で色が白いので、阿酥と名付けた」 (G3/4/25.1802)。先述のように、馮氏には「穠」 (G5/3/7.1913、G5/ 閏 3/4.1915) と、もう一人、娘 (おそらく「婉」) が生まれた (G8/1/28.2060)。

上海で探したのは 5 番目の妾だったが、見つからなかった。すると薛安林が「俞吟香の妹を見定めておいてくれたという。年齢は 18 歳、容貌は美しく足は細く [纖]、書を知り、刺繍が上手だという。その家はもとは士族であったが、ここ 10 年あまり貧窮のために書店を開いて口を糊していた。この娘も書目を書き、書物を装丁することもできる云々。早く、どうするか決めてほしい」と言ってきたので、趙烈文は自分で見てから決めるつもりであった (G8/12/18.2108)。ところが蘇州に着いてみると、薛安林は「すでに俞氏と話を決めてしまった、昨日結納金 [聘金] として洋銀 200 元 [圓] を渡してある、来年 1、2 月に虞山まで送ってくるという」ので趙烈文は非常に驚いたが、薛安林と一緒に胥門の近くの俞氏の書店に行った。兄の俞達 (字・吟香) は、

外出から帰っていなかった。母は 50 歳ばかりで、飾り気がなく、善良で慎み深い様子であった。住んでいる部屋 [堂屋] の後はすぐ台所で、娘はちょうど米をといでいるところであった。様子を窺い、客が来ていることを知ると、私に来たのだとわかり、ひらひらと行ってしまった。俞氏は別の家族 [異姓] と同居しており、娘を売るとはひた隠しにしているので、遠くから一瞥しただけだった。見て取れたのは、小柄で、肌は白く、髪は濃いことくらいだった。品格はどうか、眉目はどうか、わからなかった (G8/12/20.2109)。

その夜、兄の俞達が薛安林と一緒に趙烈文の舟にやってきた。俞達は昔からの知り合いである朱康寿^{*89} から趙烈文の名をきいたという。俞の家は

もともと貧しかったが、最近また蘇州の紳士某のせいで数百両の借金を負ったので、やむを得ず妹を売って借金を返すのだという。この話が伝わると、買いたいという者が引きも切らず、汪姓、周姓がすでに値段交渉を始めていた。(薛、引用者) 安林がそれを知って話をつけに行った [往執斧柯] というわけである。俞は私が富裕で人情に厚い [長厚] ことを知ってその 2 軒は断ることにしたのだが、私と知り合いというわけではなかった。菴卿 (朱康寿の字、引用者) もとりとめのない話をしただけであり、妹がい

ることも知らず、媒酌をしたわけではない。話が決まりそうになると、汪氏のために仲介していた者が妬んで、連日、私がもう60歳を越えている、すでに孫の嫁がいる、特に金持ちというわけではない、凶悪獷猛な人間である、妾は多く、しばしば鞭で打たれ、売り飛ばされるなどと言った。俞氏は芯からぞっとして、もともとの仲人である李応亭（蘇州人、邱姓のところで帳簿を管理している）と薛安林とに保証書を書いてもらうこと、実際に会って虚実を確かめることにした。それで夜遅くにやってきたのである。私ははじめその理由を知らず、悲痛な様子を目にして、非常に哀れに思っていた。あとで安林が内情を話して、はじめて納得がいった（G8/12/20.2109）。

その翌日、薛安林が俞家に行くと、俞氏の母と兄は誤解だったことを認めたが、「未婚の娘を恥知らずに客に会わせるわけにはいかない、見物代〔花粉看銭〕も受け取らないと言う」ので趙烈文は相手と会うことはできなかった（G8/12/21.2109-2110）。趙烈文は俞氏の娘のために首飾りを買ったり、「10あまりのことを準備して、すでに洋銀〔洋蚨〕140餅も使ってしまった」（G8/12/22.2110）が、その後また「仲人・李応亭に洋銀100元〔圓〕」（G9/1/11.2113）をおくった。さらに「新しく誂えた上着とスカート〔裙〕1箱を送り、俞姫の嫁入り道具の一助とした。また結納金〔聘財〕として洋銀400元〔圓〕を贈った」（G9/1/13.2113）。

俞氏の娘が常熟に到着した（G9/1/17.2113）。1月20日に結婚することにしたが、俞氏の母と兄は舟を西門の外に泊めており、「すぐ近くにいたが、我が家には来なかった。往来しないと約束したからで、園の西で岸を隔てて遠望しただけである。哀れには思うが、人情は測り難く、家に入れる気にはならない」。家に着いた俞氏に「催妝^{*90}之篇」をやったところ、とても嬉しそうな様子だったという（G9/1/19.2114）。俞氏は「幼い頃に勉強したところがあり、文を粗々知っている。いずれ〔它年〕黛楼秘蔵の書物〔秘冊〕をまかせることにする」（G9/1/20.2114）。眉があでやかであり、黛語楼で秘書をつとめるので、名を黛娟とした（G9/1/22.2116）。「黛語楼」は光緒元年に落成した建物であり、その下が「能静居」であった（G1/12/18.1731）。

問われるままに、俞氏は趙烈文に自分の身の上話をした。父・俞鶴齡は若いころ貧しかったので書を捨て商売を学ぼうとし、質屋の会計係になった。書籍が好きで、旧本をたくさんもっていた。やがて主人と合わずに辞職して、万卷楼書店をつくった。しばらくは豊かに暮らしたが、晩年、朱家角（江蘇省松江府青浦県にある鎮）に分店を出したところ損をして、憂いやつれて亡くなった。光緒5年のことである。兄の俞達も父と同じく書が好きだが、生活はいっそう下手で、付き合うのはすべて貧乏な〔寒賸〕文学の士であった。その日暮らし〔家無儋石〕なのに、人助けが好きであった。父が亡くなったとき数十両だった借金は、2、3年のうちに10倍になった。終日借金取りに罵られ、気の休まるときがなかった。母・劉氏は死にたいと言って泣く。朝から晩まで針仕事をして食費の足しにしようとしたが埒があ

かないので身売りをして母を生かそうと思い、去年の9月に母の姉で寡婦の某ばあさんに洩らしたところ、母や兄に責められた（G9/1/22.2116）。

それからまもなく、兄は蘇州の洪順之という紳士のために仲立ちをして西洋の商人から数百両を借りてやった。洪家は妻に牛耳られていて返済することができず、夜逃げしてしまった。西洋商人はもともと洪氏のことは知らず、毎日刃物をもって俞氏のところにやって来て罵詈雑言を浴びせた。母はやむを得ず、娘を撫でて泣きながら言った、「おまえの父を辱めることをおそれて、おまえの孝心に反対したが、こうなっては、おまえの兄は生きていられない、そうすれば俞氏の祀が途絶える。二つを量りにかけて、おまえの志に従うしかない」。兄もまた泣いて妹に詫びた。先述のおばに告げると、希望者〔問名者〕が相次いで、後添いであるとか、長男の嫁とは住まいを異にするとか、礼に則って迎娶するとか言ってきた。彼女は昂然と〔慷慨〕兄に言った、「妾は妾ですわ。運命はどうしようもありません。そんなことが何になりますか。それに、連中のでたらめはあてになりません。たくさんお金をくれればそれで事足ります」（G9/1/22.2116）。

ちょうどその頃、薛安林が趙烈文のことを話したのである。俞達は趙烈文のことを以前から知っており、妹に言った、「これは大家紳宦であり、教養〔文名〕は長江の南北に知られている。大商人は色事のほかに何も知らないが、詩礼の族なら妾といっても礼をもって遇してくれる」。妹も承知したのでよそを断って、薛の願いを容れたのであった。話が決まると、先述の誤解によって母は泣いて嫌がったが、俞氏は自分は薄命であり、食べていけさえすれば良い、心配しないでくれと言ったのだった。だが、常熟では礼を尽くして迎えてもらった（G9/1/22.2116）。

結婚の翌日、俞氏はおつきのばあやを母と兄のところに遣って、旦那様と奥様はとても良くしてくださいと伝え、趙烈文にもらった詩を兄に見せた。母も兄も喜んだ。兄は船舷に身を伏せて趙烈文の詩を書き写して小箱にしまった。兄は、妹はすでに所を得た、自分もなんとか罪を免れた、妹には礼法をまもり、人に笑われないようにしてほしい、家は辱められたが、まだ雪ぐことができるとばあやに言った。一部始終をきいた趙烈文は、「女子が己の身を顧みず、我が身を売って兄と母の災いを除いたこと、兄は妹を売るにあたって大家を選び、妹が嫁したあとも金をせびらず、私の詩を書き写して宝物のようにしていることを思った。いずれも得難いことであり、末世風俗の恥じ入るところである」と感心した（G9/1/22.2116-2117）。

趙烈文は鄧夫人や妾たちと一緒に何度か写真を撮っているが、そのうちの1枚は次のような構図であった。

私と南陽君、馮、俞でいっしょに1枚撮って貰う。私は机に向かって字を書こうとしており、筆を手にして、筆の毛を触っている。南陽君は机の東に坐っており、目は机の上の本を見ている。馮姫は右手に大きな巻をもって南陽君の後に立つ。俞姫は本を捧げ持

ち、私の右に立つ。机の上には図史、祭器、文具、茶・酒の道具、金石、犀玉をことごとく並べる。すべて天放楼と黛語楼所蔵の名品である (G9/11/27.2152-2153)。

趙烈文は蘇州で俞姫を家族に会わせてやったこともある (G9/10/13.2145)。「俞姫の母、兄、2人の妹が舟に会いに来たが、私が戻ってくるときいて小舟で去った。わずか8歳の幼い妹・小鶯だけは残って、姉と抱き合って小声で話し、ときどきすすり泣いていて、非常に哀れであった」。兄・俞達は「詩と文章の原稿それぞれ2冊を私に直して欲しい [正] と言う。雅音ではないが、非常に清思に富んでいる」。俞達は吐血し、薬も効かず、息も絶え絶えである。「商家が急に高雅を愛好するのは大いに不吉である。高雅を重んじて仕事もしないで [痴呆懶散、没落せず]にいられようか。その愚かさは惜しむに足らずといえども、その志はあわれむべきである。素封家 [世家大族] には、日々美食に飽いても全く書物に親しまない者があふれている。ただ財産が多いというだけで人が寄ってきて重んじられる [為世親重] のである。有識の士であれば、あちらを高く、こちらを低くはしない」 (G9/10/17.2146)。趙烈文は「薬代10銀餅をやったところ、3度辞退したあとと受け取った。廉恥心が失われていないので、嫌にならない」。小鶯は、姉と虞山にしばらく滞在することになった (G9/10/18.2147)。

趙烈文は、俞氏の母とすぐ下の妹^{*91}を常熟に引き取ってやることにした。俞達が亡くなり、「俞姫の母がひとりぼっちで貧しく、行くあてもないので、養うことを許した」 (G11/4/8.2218) のである。俞氏の母は、趙烈文の家で2年足らずを過ごしたあとに病死した。「貧苦の一生であったが、しっかりした人で、我が家にきて20ヶ月になるが、みだりに金銭を欲しがったりしなかった。俞姫が自分の金を少しやろうとしても受け取らなかった。内職に励み、洗濯や縫い物をして、病気でも休まなかった。働かざる者食うべからずと言っていた。娘たちをきびしく教え、軽々しく話したり笑ったりしなかった [言笑不苟]。私も南陽君も彼女のことは重んじていた」 (G12/11/27.2288)。

俞達の「納棺もできなかった」ので、俞氏の末の妹・小鶯は、「その母が我が家に質入れた [質錢]」 (G11/4/8.2218)。その年のうちに俞氏の母に銀150餅が贈られて珠琲之聘がなされ (G11/11/14.2242)、光緒15年、小鶯も趙烈文の妾となった。「我が家で育つことすでに7年になる。(中略)10歳のときに、彼女の母が珠琲之聘を受けてから数年がたつ。(中略)南陽君はとくに可愛がっている」。姉の部屋の向かいである黛樓西間に住ませ、名が鶯なので、字は春院とした (G15/2/13.2384)。結婚の翌日、屋敷をながめながら、趙烈文は「年取ってこんな福がそなわるとは思わなかった。世を出て趨離という道徳は私にはない。世にあって有為という運命でもない。身分は卑しいが、世間の貴顕などちりあくた [真土苴] である」 (G15/2/14.2384)。

趙烈文はときおり家族を連れて名勝を訪ねている。光緒3年に、山水が大好きな鄧夫人を、ようやく虞山に連れて行くことができた (G3/8/12.1815)。「私と南陽君には、山水之約

があり、10年あまりになろうとしている」(G3/10/3.1825)のであった。大旅行としては、2度の杭州旅行があった。1度目は光緒8年である。「南陽君はずっと前から杭州に行ってみたくて言っていた。毎年何かあって行けなかったもので、一緒に行って約束を果たすことにした。虞山には大舟がないので、私が先に蘇州にいて舟を雇って迎えることにする」(G8/3/17.2065)。蘇州で舟を二艘雇い、一艘には自分が乗り替え、もう一艘は南陽君を迎えにやった(G8/3/19.2065)。3月21日、鄧夫人が馮氏、娘の穠と婉^{*92}を伴って蘇州に到着した(G8/3/21.2066)。23日朝に出航(G8/3/23.2066)、24日に嘉興府に寄り(G8/3/24.2066)25日朝に舟を出してその夜は石門県に停泊し(G8/3/25.2066)、26日に杭州に到着した(G8/3/26.2067)。銭湖^{*93}の北、呉山の正面にある「瞿氏湖楼」を借りた。「湖全体が見渡せて、気持ちがいい。借り賃は一ヶ月洋銀11餅である。高いが構わない」(G8/3/27.2067)。

浙江省は、先祖の趙申喬が布政使と巡撫をつとめた地である。4月1日には、「衣冠を正して城内呉山の恭毅府君祠に詣った」(G8/4/1.2068)。恭毅とは趙申喬^{*94}の諡である。その後、岳飛の墓や靈隱寺(G8/4/3.2068)、六和塔、虎跑泉(G8/4/19.2077)など杭州の名所を巡った。宿は素晴らしく、「楼に座って眺めると、平らな湖に雲がたちこめ、山々はすっかり隠され、霧がどこまでも広がっている。去りがたい、と南陽君と溜息をつく」が、25日に帰途に就くことにした(G8/4/22.2078)。26日朝に出航(G8/4/26.2079)、27日に嘉興に着いて六姉の娘「陳氏女甥」を訪ねると、なんと六姉が22日に亡くなったという。「この一年、しばしば姉と会う約束をしたが、ささいなことで約束を違えた[違言]。年をとってますます怒りっぽくなったと聞いていたので、衝突するのが嫌で行きたくなかったのである。永別がこのように早いとは思わなかった」(G8/4/27.2079)。

2度目の杭州旅行は光緒10年である。今度は有名な「大海嘯」、すなわち銭塘江の逆流を見るのが目的であった(G10/8/7.2188)。鄧夫人、黛娟、小鶯をつれて出かけ、蘇州や嘉興などに寄りつつ(G10/8/10-16.2188-2189)、8月17日に杭州に着いた(G10/8/17.2189)。

浙江の潮は今日が最大である。昔から素晴らしいと言われており、杭州では城中こぞって見に行くのである。私も数百里をものともせずに来てきた。(中略)銭塘江に面した飯屋のテーブルを賃借りして、未刻(13-15時、引用者)から申(15-17時、引用者)初一刻まで待つと潮がくる。(中略)2回潮が来たが、全然見応えがない。今年の潮は小さいのかもしれないが、いわゆる銀城雪岭というのは、数丈壁のように切り立ち、天を呑み日に注ぐものだと思っていた。おおかた文人が名を好み、観潮をうたおうとしたが期待はずれだったので[無以解嘲]、大げさな言葉で後世を欺いたものであろう。私は泰山にも行ったし、潮も観た。いずれも何ということもなかった[不著一字]。名が実を越えており、精神を感合せ心をふるわせる[怵惕心目]ことはなかった(G10/8/18.2189-2190)。

だが、この旅行には思わぬ土産があった。胡光墉（字・雪岩）^{*95}のコレクションが売りに出されていたのである。左宗棠を後ろ盾として栄華を極めた胡光墉だったが、光緒10年に破産した。骨董屋の徐生のところを覗いてみると、胡雪岩のものを売っている。

4つ選び、銀150餅でどうだという。徐生は妥協し、私のほうも銀10餅増やして成約した。私は若いころから金石文が好きだが、世に残る祭器は日に日に少なくなり、富貴の人が争うように買って所蔵するので、手の出ないほど値上がりしてしまった。したがって書齋にはいままで重器はなかった。胡氏が破産し、諸物が放出され、値も非常に安い。ついに無理して買ってしまった。貧乏人が突然金持ちになったようなものである（G10/8/22.2191）。

徐生が諸器を送ってきた。有り金をはたいたが足りない。蘇州にもどってから不足分を送ると約束した。（中略）杭州のじゆんさい蕪菜は春より秋が良い。これまた他所にはないものである。（中略）このたびの山水の旅は天候にも恵まれ、商・周の重器も手に入れ、非常に愉快である。明朝帰るが、山霊に他日また来ると約束する（G10/8/23.2192）。

公事への関与を避けた趙烈文だったが、ときには旧知の顯官との付き合いも生じる。1人は、曾国荃である。前節で述べたように、趙烈文はかつて曾国荃のもとで働いたことがある。光緒10年1月、曾国荃が兩江總督代理^{*96}に就任したため、「曾沅帥に紹介してほしい」（G10/4/12.2168）、息子のために「新任江督・曾沅帥の推薦状がほしい」（G10/4/5.2167）などという依頼が相次いだが、趙烈文は断った。しかし、挨拶に行かないわけにはいかない。南京へは上海から汽船で行くことにした（G10/5/7.2170）。南京の總督衙門に曾国荃を訪ねて「長く話した。茶が3度換えられた。聞かれたことには詳しく答えた。（中略）役所に留まって相談ののってほしいと言われたが、病と称して固辞した」（G10/5/19.2172）。翌年の『日記』から、この時の二人の会話の内容をうかがうことができる。「前年、總督衙門〔節署〕で公にお会いしたとき、地方の大悪人〔元悪大慝〕は誰かと訊かれて、答えられなかった」（G12/8/26.2275）。

南京の伝統ある歓楽街・秦淮河は、太平天国を境にすっかりだめになっていた。「乱ののち、妓楼〔倡楼〕は揚州人ばかりになってしまった。ふざけるしか能がなく、客〔游客〕に事えるのもまた無骨者〔武夫〕が多くなった。秦淮の風趣も地をはらった」（G10/5/22.2176）。王毓雯氏は揚州について、「蘇州が中国の主流をなす伝統文化の中心地であったのとは対照的に、明代中期から新興の徽州商人（中略）によって次第に新しい文化が形成された」と述べて、「士大夫階層が指導的であった蘇州の社会における文化活動」との違いを指摘している^{*97}。

趙烈文は5月23日に帰途につくが、その前に南京で寄りたいたところがあった。「小艇に

乗って莫愁湖に行く。(中略) 曾文正(曾國藩, 引用者)を祭つてある。文正專祠に行く時間がなかつたので、ここでお詣りする。感謝の気持ちで昔を懐かしむ。知らず知らずのうちに涙が流れる」(G10/5/23.2177)。曾國藩が世を去つたあと、清の朝廷は、曾國藩がかつて職に就いたことのある地にはすべて祠を建てて祭祀をおこなうようにとの詔を下した。曾國藩がかつて两江総督をつとめたので、南京では清涼山に金陵官祠がつくられたが、莫愁湖の勝棋楼にも肖像が掲げられていた。光緒14年になると、莫愁湖には曾公閣が建設された*98。趙烈文の曾國藩への感謝と思慕の情は、生涯変わることはなかつた。常熟の自宅でも、光緒4年の正月から、趙烈文は「曾文正公の小象を雪亭にかけ、お茶と果物を供え、宋版の書を並べ、拝み終わるとしまった。今後毎年のしきたり」(G4/1/1.1845)としたのだつた。

往路は汽船だったが、復路は舟である。「旅は官途に譬えることができる。汽船なら1日千里に行くことができる。速くて便利なのが良くところだ。しかし、いつも危険と隣り合わせで、大勢が雑居しており、少しも自由がない。内地の小舟を雇えば、遅くはあるが、進退はゆっくりしており、進みたければ進み、止まりたければ止まる。両者を較べると、私はやはり後者がいい」(G10/5/27.2178)。舟は便利な乗り物であつた。岸につないで船内で眠ることもできれば、上陸して宿に泊まることもできた(たとえばG10/5/26.2178)。

光緒12年9月、曾國荃が巡行の途中で常熟を訪れたとき、趙烈文はもう一度曾國荃と会っている。曾國荃は時局を語つて憤慨していた。曾國荃は、「人材が払底して風気が日に日に退廃している、道員から州県まで権勢を競い合うのがふつうとなり、堅実[深厚]を装つていても測りがたい者が多い。任免の権を握つてるといつても、一人を弾劾しても後任が善いとは限らない、もっとひどいかももしれない、どうすれば良いのだ」と語つている(G12/9/14.2278)。

もう一人の旧知は黄彭年である。前節で述べたように、趙烈文と黄彭年は保定で『畿輔通志』の編纂に力を合わせていた。光緒3年に李鴻章が趙烈文の辞職願いを聞き届けてくれたのも、黄彭年の力添えのおかげだつた(G3/2/20.1795)。その黄彭年が江蘇布政使に任命された*99(G14/3/17.2346-2347)。黄彭年の招きを受けた趙烈文は、「久しぶりなので会いたい」と思い、蘇州に向かつた(G14/4/3.2348)。

14年ぶりである。寿老(黄彭年, 引用者)の髭と頭髪は真っ白になつたが、相変わらず元気である。泊まっていけといつて引き留められた。断つてもだめである。貴人に近づくのは好きでないが、このご老体だけは今でも書生らしさを失つていないので、明日また行くと言つた(G14/4/7.2349)。

通達を起稿し、候補官の試卷を見てくれと黄彭年に頼まれたが、趙烈文は断つた(G14/4/9.2350)。黄彭年の

藩署（布政使の役所，引用者）の使役〔使令〕は5，6人しかいない。1ヶ月に数両を与え，心づけ〔門食〕を取るのを許さず，キャラコしか着せていない。主人父子も着ているのは繭紬^{けんちゆう}である。その清節は文正曾公（曾国藩，引用者）とよく似ている。行政は少し苛に近く，人を論じると少し刻に近い。私は言いたいことをすべて言った。士大夫の末節をすべて清めようとなさっていますが，寛大になさるべきですと。（黄彭年は，引用者）そのとおりだと言ったが，人の気質にはそれぞれ癖があり，易えることはできないものだ（G14/4/10.2350）。

この年の秋，黄彭年は突然中風のような病にかかってしまった。「老年に官場に出て掣肘され，末疾（手足の病氣，引用者）になってしまった。非常に心配である」（G14/9/12.2366）と趙烈文は書いている。しばらくしてから，「官署は野人が軽々しく行くところではないので」名刺だけ渡しに行った〔通問〕趙烈文は，黄彭年から迎えが来たので会いに行った。「病はすでに良くなっており，私が来たのをみて大喜び」したが，黄彭年の悩みは深かった。

吏は良くなく政も劣等で，治めるのは容易でないという話になる。私は言った，江蘇省の大政は税〔丁漕〕に過ぎるものはなく，その弊害は枚挙に暇がありませんが，変革できないばかりでなく，軽々しく議論することもできません。風俗にいたっては，由来がさらに長く，言葉で戒めようとすればいたずらに文書が多くなるばかりで頑愚を戒めることはできません。法で戒めようとすれば結局吏胥が利を得る〔飽〕ことになり，怨嗟が生まれます。今日できること，してよいことは，表面的なことだけなので，あまり熱心になさる必要はありませんと。寿（黄彭年の字は子寿，引用者）は何度も頷いていた（G14/11/1.2372）。

趙烈文の上の言葉は，憂国の士である黄彭年を満足させるものではなかっただろう。

趙烈文の関心は，「静圃」と名付けた庭園にあった。修復が必要だったが，先立つものがない。

静圃の西南の隅は相変わらず荒れ果てているが，工事をする力がない。堤は次第に崩れつつあり，池沿いに石岸を作らなければ維持することはできないが，大きな工事となる。最初に園全体の構造を決めたとき，南洲の上に5楼作り，天放楼の名をこちらにつけ，家の図書はすべてそこに保存するつもりであった。四方を水で囲まれ，家屋に隣接していないので，永久に保存できると考えたのである。西側の堤の端には，二階建ての円形の亭をたてれば，遠望できるであろう。その他の小亭，小榭，連廊数十丈，さらに石岸，長橋で，合計洋銀2000元〔圓〕以上になる。焦慮するがどうしようもない。蘇州の劉園，顧園などは開放して参観料をとっている。私はそれを馬鹿にしてきた。両園

の主はいずれも大金持ちなのに、どうしてそんなことをするのかと思うからである。一方、我が家は日に日に貧窮しつつある。20年カヤを刈ってきて「誅茆」、心身ともに疲れて骨身にしみるが、倒壊するのは見るに忍びない。全財産を投じて園を完成させてから、蘇州人のやり方をまねる、数年後に穴埋めができたならやめるといっているのであれば、墮落したことはない。家の者たちとじっくり相談したが、みんな賛成してくれた（G12/2/6.2252）。

上の文中の劉園や顧園は「いずれも大紳の財産」（G10/4/1.2166）であった。「劉園」は、今日の「留園」である。蘇州の閶門外にあり、面積約30畝、蘇州の大型古典園林の一つである*¹⁰⁰。造園が始まったのは明・万暦年間のことであった。その後、人手に渡り、劉恕（1759-1816年）が「寒碧莊」と名付けたが、人々は主人の姓をとって「劉園」と呼ぶのを好んだ*¹⁰¹。咸豊10（1860）年、太平軍のために蘇州の園林の半ばが廢墟「墟莽」となったが、この園は無事だった。やがて常州陽湖人の盛康*¹⁰²が入手して、盛家の別荘・祠堂の所在地とした*¹⁰³。盛康は世人が「劉園」と呼んでいたことを考え、袁枚が隋氏の園を買って「隨園」と名付けた例にならって、名を「留園」とした。音は変えず字だけを変えたのである*¹⁰⁴。趙烈文も、劉園は「戦災にも無事で、常州〔吾里〕の盛旭人（盛康、引用者）がこれを手に入れて一新した」（G3/1/9.1789）、盛旭人を訪問したが会えなかったと書いている（G3/1/10.1789）。盛康が亡くなったあと、留園は官商として知られる息子の盛宣懷のものとなった*¹⁰⁵。

「顧園」（「怡園」）のほうは、顧文彬*¹⁰⁶が白銀20万両を費やして、明・成化年間に造られた「復園」の旧跡に建てたものである。同治13年頃から建設が始まり、光緒8年頃に完成をみた*¹⁰⁷。築山は「環秀山莊」、洞壑は「獅子林」、水池は「網師園」、復廊は「滄浪亭」といった具合に蘇州諸園の粹を集めて造られた庭園であった。辛亥革命前は一般開放されていなかった〔平時不对外开放〕が、見たいという人には、名刺で入園遊覧させていたという*¹⁰⁸。趙烈文は怡園に強い関心を抱いていたようで、「顧氏の新築の怡園に案内してもらう。良い石が多いが樹がない。構造は密麗である。惜しむらくは職人くさい〔匠気重〕」（G2/10/25.1774）、「顧氏怡園に行く。しつらえ〔布置〕を細かく見る。狭苦しい〔逼窄〕のが良くない。目の遣り場〔送目処〕がない。長廊は広くなったが、堂室が狭いのが耐えられない。ただ石峰は数が多く、良いものである」（G12/10/22.2282-2283）。

趙烈文は留園や怡園の主のような大富豪ではない。「近頃は金が乏しく、土木の費用もかかる」ので、薛安林が教えてくれるという商業取引をやってみようと上海に行くことにした（G12/4/10.2258）。4月11日の朝に舟を出して、申刻（15-17時）に崑山県に到着、食事をしたあと上陸して城内を散歩して茶楼で一服した（G12/4/11.2258）。翌朝出航して、その夜は黄渡で停泊した（G12/4/12.2258）。翌朝出航し、引き潮に乗じて、酉（17-19時）に上海に着いた（G12/4/13.2258）。光緒8年と同じく、このときも常熟から上海に行くためには舟

上で2泊している。

安林と小東門^{*109}十六鋪の油商・王元吉の家を訪ねた。商人は牛莊（現在は遼寧省に属する、引用者）から、だいた油を売りに上海まで南下してきた。安いので買いだめしておけば利益が出るということだった。今月はじめ、安林が1石銀3両あまりまで値下がりしたときいてきた。非常に安いので上海行きを約束したのだが、行商人〔負販〕がすでに続々と集まって、4両2、3銭にまで急騰してしまった。今日やや下がったときいて来たのだが、1石4両というので、がっかりして帰る（G12/4/18.2261）。

商売はあきらめたが、上海は相変わらず面白い。洋食の本場でもある。

海天春西洋料理館で昼食をとった。とてもおいしかった。牛テールスープ〔牛尾湯〕があった。仔牛の尾の肉をサイコロ状に切って煮たスープである。吉列魚はマナガツオを半分に切って両面を油で揚げたものである。エビサラダ〔生菜蝦〕は、中国のだいこん〔蘆蕪〕のような外国の菜葉を生で切って、えびの肉を加え、黄色いあぶらをかけたものである。卵黄、胡椒〔椒末〕、甘酢〔糖醋〕、外国の植物油5種を混ぜて作るのだという。この料理が最もうまかった。カレー鶏飯は肥えた鶏にからし粉などを入れて紅焼（砂糖を油で炒めて黄色にし、醤油を加える、引用者）にし、うるち米の飯とまぜたものである。それに焼牛肉などである。2種の料理で洋銀1.5餅〔番銀1餅又半餅〕であり、非常に安い（G12/4/16.2260）。

上の「黄色いあぶら」とはマヨネーズであろうか。趙烈文は2日後にまた同じレストランを訪れて、「4品だけ食べた。また牛テールとサラダを注文した。作板魚はヒラメの両面を油で揚げたもの、エビ飯はエビをハムとまぜた炒飯である。2人で洋銀〔番銀〕1餅であった」（G12/4/18.2261）。「作板魚」はヒラメのムニエル、「エビ飯」はエビピラフかと思われる。趙烈文はコーヒーも好きで、光緒14年の『日記』には、「連日、西洋のコーヒー〔加非湯〕を飲んでいる。胸〔胸膈〕がすっきりして汗も出る」（G14/6/21.2357）と書かれている。

趙烈文は上海で「張園」を見学している。園主の張叔和は光緒8（1882）年にイギリス商人・和記洋行から、この土地を購入した。張園の最大の特色は、中国園林と西洋園林を融合させた点にあった。光緒9（1883）から光緒20（1894）年にかけて張園は何度か拡張され、最大時には60畝あまりに達した^{*110}というが、張氏が買ったときは、

土地は28畝^{*111}、洋楼3間、花房瑠璃亭2カ所、水池約2畝、周囲は木槿のまがきだけである。銀2万両もしたという。新たにそばの土地20畝あまりを加えて、合計50畝あ

まりである。広い。洋楼のほかには何も無い。石を買って山を築き、園を完成させるには、銀10万両、10年はかかるだろう。最近、参観者から金を取っている。入場料は洋銀〔番銀〕1角（1元の10分の1、引用者）である（G12/4/15.2259）。

光緒12年秋、趙烈文が心血を注いだ静園が完成の日を迎えた。

この土地を手に入れてからすでに22年になる。非力〔力薄身孱〕で、いつも今生で願いはかなわないと言っていたが、今ついに成功した。老妻は手を挙げて祝ってくれる。米団子〔米圓〕をつくってみんなで食べて祝った。住宅と園中の樓堂榭亭とをあわせて部屋は120間、廊下〔走廊〕の内外あわせて80間あまり、石山2つ、大小の橋6つ、果樹や草花は千を以て数える。莊観ということが出来る（G12/9/28.2280）。

寧波人の魔術師たちが呼ばれた。「部屋にテーブルを置く。首はテーブルの上で会話ができるが、体は見えない」（G13/4/1.2305）。魔術師が興行すると、観客が大勢やって来た（G13/4/2.2305）。孔雀2羽、ハクカン2羽、石づくりの猿〔石猴〕一つが購入されて、園林に色を添えた（G13/4/5.2306）。静園は貸し出しもされた。「県人・婦某が我が園を借りて、3日間琵琶会を催す。今日が初日である。たくさん人が来た」（G13/閏4/23.2309）。光緒13年6月には2回も貸し出されている（G13/6/8.2314, G13/6/21.2315）。

「妻子や友人は、これまでに書いたものを集めて文集とするよう熱心に勧めてくれるが、自ら顧みて大したことはなく〔虚薄〕、世に問うに足りない」（G15/1/1.2379）と趙烈文は欲がなかった。『日記』の最後の日付は光緒15年6月20日である。『年譜』によれば、「この後の数年間は、おそらく病気がちだったのであろう」^{*112}。趙烈文が亡くなったのは光緒19年6月28日、62歳^{*113}であった。西暦でいうと1893年である。紳士の平均寿命は57-58歳であった^{*114}というから、それより少し長生きしたということが出来る。鄧夫人はその2年後にこの世を去ったが、「妾たちや子女を大切にした〔遇〕」ので、亡くなったときには慟哭し気を失う者もいた。親類はなかなかできないことだとした^{*115}。

第6節で、趙烈文の収藏品・日記・遺文の類は、次男の趙寛が受け継ぎ、趙寛はそれらの刊行を企図したが果たせず、上海で客死したと述べた。補足すると、趙寛は光緒27（1901）年頃に瞿鴻禨によって経済特科に推薦〔保薦〕された。その後、浙江省で知県をつとめ、江西巡撫や两江総督の幕僚にもなった。民国初期に蘇州府震沢県や江南官産処の仕事をしたあと、引退して著述や考訂に打ち込んだ。流寓先の上海で77歳で病没した^{*116}。

趙烈文の庭園は「趙園」「趙吾園」「趙壺園」などと呼ばれていたが、民国の初めに「水吾園」と改名され、常州盛氏によって購入された。盛氏は園を常州の名刹・天寧寺に喜捨してその下院とし、園は「甯静蓮社」と名をかえた^{*117}。「武進天寧寺志」には、次のように記されている。

甯静蓮社、常熟県西門内の「環綉街」にある。もとの名を「彭家場」という。もともと趙姓の財産で、「静圃」という名であった。民国初年、武進盛氏によって購入され、その後本寺に寄進されて下院となった^{*118}。

上の文中の「武進盛氏」には「盛宣懐を指す。実際はその夫人である莊徳華が寄贈した」という注が付されている。莊夫人も常州の出身であったが、盛宣懐の没後10年、莊夫人が1927年に世を去ったとき、盛家にはなお銀1000万両にのぼる財産があったという^{*119}。今日、静圃は「趙園」と呼ばれ、常熟の名勝の一つとして、人々に愛されている^{*120}。

〈注〉

- *1 図中に常熟県と昭文県の役所がそれぞれ「旧県署」「旧昭文署」と書かれているのは、『重修常昭合志』が民国7(1918)年に編纂された(常熟市地方志編纂委員会編『常熟市志』上海人民出版社, 1990年, 80頁)からである。光緒29(1903)年に、もと翰林院編修・龐鴻文らが『常昭合志』(48巻)を編集し、民国6(1917)年に、丁祖蔭、邵松年、徐兆璋、瞿啓甲らが『常昭合志』をもう一度編集〔重修〕しようと協議し、丁祖蔭を総纂に推挙した(同書, 16, 18頁)。
- *2 趙烈文『能静居日記』岳麓書社, 2013年。前節と同様に、以下、たとえば「咸豊10年2月27日(106頁)」はX10/2/27.106, 「同治3年7月5日(809頁)」はT3/7/5.809, 「光緒元年2月20日(1646頁)」はG1/2/20.1646と表記する。Xは咸豊(Xianfeng), Tは同治(Tongzhi), Gは光緒(Guangxu)の発音記号の頭文字である。
- *3 Chung-li Chang, *The Income of the Chinese Gentry*, University of Washington Press (Seattle) 1962, p. 69. (以下, *The Income of the Chinese Gentry*と略記。)張仲礼『中国紳士研究』上海人民出版社, 2008年, 262頁(この中国語版は*The Chinese Gentry Studies on Their Role in Nineteenth-Century Chinese Society*(李榮昌訳)を上編, *The Income of the Chinese Gentry*(費成康, 王寅通訳)を下編として、一冊にまとめられたものである)。
- *4 范曄撰, 李賢等注『後漢書』中華書局, 1973年, 卷八十三, 逸民列伝第七十三, 2765-2768頁(吉川忠夫訓注『後漢書』第9冊, 列伝七, 逸民列伝第七十三, 岩波書店, 2005年, 557-558頁)参照。
- *5 趙廷彩については、「常州觀莊趙氏支譜」(以下, 「支譜」と略記)(卷五, 殿撰公分世表第七中, 27-28頁)に記載がある。趙廷彩の号は紫卿, 輩行は九であったので, 趙烈文は趙廷彩を, 「紫卿九兄」と呼んでいる。『日記』では, 「芷卿」と表記されていることもある。
- *6 彭信威『中国貨幣史』(上海人民出版社, 2015年, 623頁)の表によるが, 同治4年のレートは記載されていないので, 同治9-11年のレートを用いた。
- *7 第3節参照。
- *8 「典籍」(従九品)は国子監典籍庁の主官であり, 図書・碑・版などのことを管理した(朱金甫・張書才主編, 李国栄副主編『清代典章制度辞典』中国人民大学出版社, 2011年, 377頁)。
- *9 『孝豊県志』(一)(据・清劉溶修・潘宅仁纂, 清光緒三年刊本, 影印, 中国方志叢書・華中地方・第187号, 成文出版社)卷五, 職官志県令, 13(618)頁。「支譜」によればさらに「保拳以同知擢用賞加運道銜賞戴花翎」。
- *10 趙觀男の六男である趙桓玉の孫である。
- *11 今日の蘇州にも, 十全街, 袞繡坊, 醋庫巷は存在している。これら3つの通りは東西に平行してはっており, 近くに南北にはしる帯城橋路, 烏鵲橋路がある。趙廷彩を訪ねるとき, 趙烈文は舟で蘇州の葑門から入城し, 趙廷彩宅の門外で上陸している(T4/8/3.925)。

- *12 金曾豪『常熟園林品読』上海文化出版社、2009年、22頁。錢岱は常熟人、明・隆慶5年の進士、官は御史に至り、44歳で官を辞して〔告職〕帰郷し、「小輞川」園林を建造した。この名は唐の王維の別荘にちなんでつけられた（同書4頁）。
- *13 弋炳根主編『常熟国家歴史文化名城詞典』上海辞書出版社、2003年、169頁。
- *14 楊書城（諱・汝孫）は、楊沂孫の弟である（T4/7/26.924）。楊沂孫については後述する。
- *15 趙少琴（諱・仲洛）は、趙烈文が上海で知り合った趙宗建（字・次侯）のおい〔侄〕である（T4/7/26-27.924）。
- *16 周滋亭（諱は不明）は周閩山のおい〔侄〕で、最近〔新〕海門から移ってきた（T4/7/26.924）。周閩山（諱・悦修）は紹興人で、「直刺」（「刺史」は清代には知州の別称であった（前掲『清代典章制度辞典』361頁）ので、直隸州知州の意であろうか」と記されている（T2/11/16.706）。
- *17 陳乃乾『陽湖趙惠甫（烈文）先生年譜』（沈雲龍主編、近代中国史料叢刊続編第九十九輯、文海出版社、中華民國72年）50頁。
- *18 『日記』にも、同治5年に常熟の後ろ〔後進〕の家が完成して四姉一家が入居したことが書かれている（T5/4/22.978）。
- *19 二姉にふれた箇所は少ないが、「二姉と幼いころのことを話して、茫然自失となる」（T1/3/29.489）という記述がある。
- *20 第7節注3参照。
- *21 同治癸酉優貢候選訓導・鄧嘉緝「趙母方恭人家伝」「支譜」巻十六、世編第六、23頁。
- *22 『世宗憲皇帝実録（一）』（『清実録』七）巻二四、雍正二年九月甲辰條、中華書局、1985年、379頁。「昭文」という名は、境内に言偃文学の郷里があるのでつけられた（前掲『常熟市志』77頁）。言偃（前506-前443）は文学（歴史文献）に長じていた（前掲『常熟国家歴史文化名城詞典』44頁）。
- *23 前掲『常熟市志』77頁。
- *24 謝俊美『翁同龢伝』中華書局、1994年、42、563-565頁。
- *25 前掲『常熟園林品読』32頁。
- *26 翁同爵、字・玉甫、蔭生、湖北巡撫、光緒3年に亡くなった（錢実甫編『清代職官年表』中華書局、1997年、3203頁）。
- *27 翁曾源（1843-1887）、字は仲淵、翁同書の子で、同治2年状元、修撰を授かる、国史館纂修となるが、病により官を辞して帰郷した（喬曉軍編『清代翰林伝略』陝西旅游出版社、2002年、363頁）。翁同龢は同治2年4月24日の日記に、翁曾源が一甲第一名になったことを記し、「我が兄の無実の罪を少しすすいでくれた」（翁同龢著、翁万戈編、翁以鈞校訂『翁同龢日記』中西書局、2012年、299頁）と書いており、光緒13年7月20日の日記に、「仲侄」が13日に亡くなったと記している（同書、2173頁）。
- *28 翁曾源の父である翁同書は、「安徽巡撫（実際はすでに解任されていた、引用者）として（寿州城を、引用者）失い、逃避したとして、（两江、引用者）総督〔節帥〕の曾公（曾国藩、引用者）に弾劾され、刑部の獄につながれていた。朝廷には親族や知人がたくさんいたが、釈放する方法がなかった。先朝の故事で、息子が状元になったので、繋がれていた父が赦されたことがあった（常州の莊本淳侍講のことだといわれるが、私が調べたところそうではなかった）というのを援用し、ついに状元となり〔膺選〕、願い出たところ、果たして赦された。その後、父が亡くなって帰郷したところ、病を得てついに回復しなかった。その境遇は奇異というべきである」（G13/8/26.2320）。前掲『翁同龢伝』65-72頁も参照。
- *29 「虞山の習俗では、元旦は客に会わない」（T5/1/1.960）、また知人の59歳の誕生日に際して、「この習俗では、逢九を正寿とし、『慶九』と呼ぶ」（G13/7/5.2315-2316）などと趙烈文は書きとめている。
- *30 趙烈文は、楊沂孫の葬式に出かけて、「帳をからがると、悲しみのあまり声が出ず、涙を止める

- ことができず、ずいぶん時間がたってから出てきた」(G7/8/6.2038)。
- *31 趙爾巽等撰『清史稿』中華書局、2003年、巻五百三、列伝二百九十、芸術二、13894頁。
- *32 「吾族姑丈」(T1/5/9.498)と書かれているが、「支譜」に彼の名はない。「姑丈」とは「姑父」(父の姉妹の夫)である。
- *33 前掲『常熟園林品読』30頁。
- *34 常熟と蘇州のあいだの所要時間についての記述を、いくつか挙げてみると、光緒2年1月10日には「二鼓(21-23時頃、引用者)に出航[行]」し、翌日の「黎明に蘇州に着く」(G2/1/10-11.1734)。光緒3年1月6日には、「黎明に舟が出て、巳刻(9-11時、引用者)が終わらないうちに蘇州に着いた。6時間[三時]で90里進んだのであり、速かった」(G3/1/6.1788)。光緒7年10月4日には、「黎明に出航、申(15-17時、引用者)初に蘇州に着いた」(G7/10/4.2044)。光緒8年3月17日には「酉刻(17-19時、引用者)に出航、夜は停泊せず」、翌日「辰刻(7-9時、引用者)に蘇州に着く」(G8/3/17-18.2065)。
- *35 上海の「時計店で時計[鐘表]を修理する」(G8/9/26.2098)という記述がある。
- *36 Benjamin A. Elman, *From Philosophy to Philology: Intellectual and Social Aspects of Change in Late Imperial China*, Second, Revised Edition, University of California, Los Angeles, 2001, p. 289 (B. A. エルマン著、馬淵昌也・林文孝・本間次彦・吉田純訳『哲学から文献学へ 後期帝政中国における社会と知の変動』知泉書館、2014年、318頁)。エルマン氏は同書で「太平天国の乱は19世紀江南における考証学者の共同体を一掃してしまった」とも述べている(p. 290, 邦訳、319頁)。
- *37 「錢莊」と同じだと考えられる。彭信威氏も錢莊を「錢店」と表記していることがある(前掲『中国貨幣史』708-709頁)。
- *38 前掲『中国貨幣史』623頁。
- *39 魏嘉瓚『蘇州古典園林史』上海三聯書店、2005年、382頁。
- *40 前掲『常熟園林品読』36-51頁。
- *41 前掲『常熟園林品読』22頁。
- *42 前掲『常熟国家歴史文化名城詞典』169頁。
- *43 前掲『常熟園林品読』5、10頁。趙烈文は曾家と交流があった(たとえば「曾君表(君表は曾之撰の号、引用者)、君静兄弟のところに行つて、母堂の誕生日を祝う」(G6/9/3.1979))。
- *44 『日記』を見る限り、納税している形跡はない。張仲礼氏によれば、税には「役」(政府のための徭役)と「賦」(田賦)の2種類があった。徭役については紳士は免除されていた。田賦のほうは免税ではなかったが、紳士たちは自分たちの勢力を利用して納税を減らそうとした。紳士地主は平民地主と同様に田賦と漕糧を納めなければならなかったのだが、実際には賦税納入が不平等なことは、まったくよくあることであった。紳士は常に自らを「紳戸」「儒戸」「官戸」「城戸」「大戸」、庶民を「民戸」「郷戸」「小戸」と称して、納税面での違いを示した。田賦や漕糧を納めたくない紳士は、最終的には脱税することをねらって、しばしばわざと納入を滞らせた(Chung-li Chang, *The Chinese Gentry Studies on Their Role in Nineteenth-Century Chinese Society*, University of Washington Press (Seattle and London) 1974, pp. 37, 43, 45. (以下、*The Chinese Gentry*と略記。)中国語版、29-30、34、35頁)。
- *45 *The Income of the Chinese Gentry*, p. 196. 中国語版、358頁。
- *46 *The Income of the Chinese Gentry*, pp. 45-47, 58. 中国語版、245-246、254頁。
- *47 張宏傑『給曾國藩算帳：一個清代高官の収与支(京官時期)』中華書局、2015年、229頁。
- *48 前掲『給曾國藩算帳：一個清代高官の収与支(京官時期)』230頁。
- *49 前掲『給曾國藩算帳：一個清代高官の収与支(京官時期)』237頁。
- *50 前掲『給曾國藩算帳：一個清代高官の収与支(京官時期)』238頁。
- *51 趙烈文は光緒2年12月20日に「支譜」を完成させ(G2/12/20.1783)、翌年それを一族に送付

- している (G3/1/22.1792, G3/1/30.1792, G3/2/3.1792) が、それに対する報酬は記載されていない。地方については、曾国荃に手紙を書いて、「常熟・昭文の自衛〔团防〕のことで、小人が邪魔するので、代わって事情を伝えた」(G10/10/7.2197) ことはあった。
- *52 馮爾康「清代地主階級述論」南開大学歴史系中国古代史教研室編『中国古代地主階級研究論集』南開大学出版社、1984年、258頁。張宏傑氏によれば、「1811(嘉慶16)年に曾國藩が生まれたとき、家には田地が100畝あまりあった。(中略)1人平均少なくとも12畝半であった。清末の中国人の1人あたりの田地は学者の楽観的な計算では3畝、悲観的な計算ではわずか1.4畝であった」(前掲『給曾國藩算帳：一個清代高官の取与支(京官時期)』8頁)。
- *53 魏源によれば民間で米1石は「豊作の年〔豊歳〕には2両、凶作の年〔儉歳〕には3両、飢饉の年〔荒歳〕には4両」(魏源『聖武記 附夷艘寇海記』附録卷11, 武事余記, 兵制兵餉, 岳麓書社、2010年、507頁)であった。
- *54 前掲『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』8, 64頁。
- *55 陳鍾英は湖南省衡州府衡山県人、道光29年に挙人になり、浙江省の台州府黄巖県、杭州府富陽県、湖州府安吉県、寧波府鄞県などで知県をつとめた。「陳氏は湖南籍、四川に寄寓して数世になる。乱にあって帰れなくなり、常州の十子街に住んだ」(G8/5/10.2082)。宋慶陽氏の「初月曳輕雲 陳衡哲在常熟」(『江蘇地方志』2014年第1期、54頁)によれば、陳鍾英の妻(趙烈文の六姉)の名は趙蕉雨、娘(趙実の妻)の名は陳德音(『日記』には陳德音と記されている)である。
- *56 第4, 5節参照。
- *57 趙烈文が曾紀沢に書いた手紙によれば、趙実は「謄録をもって候選通判に議叙された」(G12/11/9.2286)。
- *58 羅蘇文『上海伝奇——文明嬾變的側影(1553-1949)』上海人民出版社、2004年、181頁。
- *59 光緒14年も郷試に失敗している(G14/7/11.2359, G14/9/23.2367)。
- *60 「公武」は字である。第7節注68参照。鄧夫人のいとこにあたる鄧嘉繩だと考えられる。
- *61 第7節注146に長女・柔と方愴の息子と書いたがそれは誤りで、趙烈文の息子である。訂正したい。
- *62 前掲『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』58, 74頁。
- *63 趙烈文は曾紀沢と親しかった。北京に向かう曾國藩を見送ったときの『日記』に、「劼剛(曾紀沢の字、引用者)も私に手厚い。最初は御曹司〔貴介〕であるので、昵懇にならないようにしていたが、近年ますます親敬を増し、兄弟の序を望むようになった。詩などを渡すと、いずれも再三稱賛敬服してくれる。連日、私が惜別の意をもち、いままた私が涙をこぼすのみを、溜息をついていった。『私も知人は多いが、あなたのように真摯な人はみたことがない』(T7/8/3.1199)と書かれている。
- *64 前掲『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』8, 9頁。
- *65 前掲『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』24, 39頁。
- *66 「一(定)〔錠〕」(T2/2/5.627)と表記されているので、原本では「錠」が「定」と記されていたらしい。「元宝」(宝銀、馬蹄銀ともいう、重さは50両)(前掲『中国貨幣史』575頁)であろう。
- *67 方愴・方恒兄弟の父親である方駿謐(字・幼静)は、趙烈文にとって母方の従兄弟にあたる。方駿謐はかつて河南省靈宝県知県であった。方駿謐が同治11年9月28日に亡くなったとき、易州で知州をつとめていた趙烈文は、「官について数年もたたないうちに、本道にさからって対掲免職となり、零落し、憂鬱のなかで死んでしまった。悲しい〔傷〕、悲しい。4人の孤児が遺された。長男と次男はいずれも私の婿であるが、その他はまだ幼く、寄迎なく〔家無一椽〕、どうやってやっていくのだろうか。官途の末路がこのようでは、畏れずにいられようか」(T11/10/14.1519)と嘆いている。

- *68 光緒4年、趙烈文は次女一家を自分の家に住まわせて、報本街の家は賃貸〔典賃〕して日常の費用とすることにした (G4/8/11.1887)。だが「次婿・子永は家族を連れて、城東の鍾勝巷 (地図に「鍾勝巷」は見当たらない。「鍾」と「忠」はいずれも中国語では「zhong」という音であるところから、図8-1の城東の「忠勝巷」ではないかと考えられる、引用者)に引越した。頼りあうこと4年、方氏は私に頼って生きていると誰かに言われ、子永はプライドが高い〔耿介〕ので、別居したいと言いつつ出たのである。小人の口はおそろしいものである (G7/12/17.2054)。
- *69 趙烈文は早くから古いに疑問を感じてはいた。「丁軍門は私と同年、同月、同日、同時の生まれである。(中略)境遇は全然違い、運命〔年命〕の説がいいかげんなことがわかる」(T2/11/18.707)。
- *70 「9月注」として「この卦は全く当たらなかった」(G4/1/1.1845)と書き加えられている。
- *71 第7節注155参照。
- *72 前節注119でふれたように、『畿輔通志』には「襄纂」として方愴の名が挙げられている。
- *73 上田裕之氏は、スペインドルを主とする西洋の銀貨＝「洋銭」について、「乾隆40年頃より江南に洋銭が普及し、同50年頃から蘇州では洋銭としては専らカルロスドルが用いられ、物価も洋銭建てになっていった(中略)そのような洋銭の拡がりには、銅銭遣いの普及による計数貨幣使用の定着を背景のひとつとする」と述べている(上田裕之『清朝支配と貨幣政策——清代前期における制錢供給政策の展開——』汲古書院、2009年、305-306頁)。銀貨1元はおよそ7/10両銀に相当した(第7節注86参照)。
- *74 後年、趙烈文は「実」の次女・韶を、「柔」の遺児・保成(柔には息子は1人しかいなかった)ので、「長綬」が「保成」に改名したと考えられる)と婚約させている(G13/10/17.2329)。
- *75 『重修常昭合志』には、次のように記載されている。「(光緒、引用者)4年旌 趙氏 国学生方愴の妻。易州知州烈文の娘。陽湖人。常熟に寄居。愴は保定で没した。氏は訃報を聞くと、日夜号泣した。息子の長綬はわずかに6歳。当時身ごもっており、家人はあまり悲しんではいけないといい、次男を産むことを願った。実家に戻って娘を産んだが、数日たたぬうちに機に乗じて自縊して命を絶った。愴が亡くなってから100日あまり、28歳であった」(『重修常昭合志』(一)(据・清鄭鍾祥等修、龐鴻文等纂、清光緒三十年刊本、影印、中国方志叢書・華中地方・第153号、成文出版社)卷三十五、「列女二 義烈」23(2364))。
- *76 趙烈文が直隸で江南に戻る曾國藩を見送ったとき、李鴻章が兄に書局の職をくれると言っているが、書局はあまりに貧しいので別の仕事を探してやってくださいと頼むと、曾國藩は必ずそうすると約束してくれた(T9/10/19.1368)。同治10年正月の手紙でも、安徽省のどこかの局に仕事〔一差〕をやってください(T10/1/6.1388)と曾國藩に頼んでおり、同年9月には、「兄はすでに職位を与えられた」(T10/9/20.1441)。
- *77 趙熙文は同治12年3月6日から閏6月18日まで易州に滞在していた(T12/3/6/1541, T12/閏6/18/1559)。
- *78 前掲『中国貨幣史』575-596頁参照。
- *79 原文では、「圓」という字が使われている。
- *80 朱保炯・謝沛霖『明清進士題名碑録索引』上海古籍出版社、2004年、2839頁。陳鼎(字・伯商)、湖南衡山人、二甲39名進士、散館後に編修を授かり、光緒15年には浙江副考官をつとめている(前掲『清代翰林伝略』403頁)。その後、陳鼎は戊戌変法に参与し、六君子とともに刑場にひかれたあと許されて、湖南に流刑となった(前掲「初月曳輕雲 陳衡哲在常熟」『江蘇地方志』2014年第1期、55頁)。
- *81 趙烈文は咸豊11年にも日本人と会っている。「一人の日本人に会う。容貌は華人と変わらない。頭頂まで頭髪を剃りあげて、後髪は頭のでっぺんにまとめて結っている。かぶり物はつけない。衣装は奇異な作りである。短刀を佩いている。人に会うと、深々と頭を下げる。坐るときは必ず床に座る。部屋に入るときは履き物を脱ぐ。いずれも古礼である。私は彼と筆談をした。自

- 分のことを僕と称する。言葉には作法〔文法〕が多い。平山謙十二郎は今どこかと訊ねたが、彼は知らないで答えられなかった」(X11/3/13.290)。
- *82 光緒8(1882)年に工部局が総量規制を放棄してから、人力車の営業免許〔捐照〕数は直線的に増え、光緒10(1884)年には2000輛/月となった(前掲『上海伝奇——文明嬾變的側影(1553-1949)』209-210頁)。
- *83 上海電気公司是、光緒8年6月12日(1882年7月26日)に電気供給を開始した(前掲『上海伝奇——文明嬾變的側影(1553-1949)』165頁)。
- *84 光緒5(1879)年、馬車で大通り〔馬路〕を乗り回すのは、中国人にとって新しい趣向となっていた。一日中、馬車や人力車が行き来していた。多くの近くの都市の中国人が上海にやってくるのは、車に乗って楽しむのが目的であった。中国人たちは車に乗って租界の大通りをドライブした。清末の公共租界の大通りでは、馬と馬車は大きな悩みの種になっていた。たとえば光緒13年5月19日(1887年7月9日)16-20時に静安寺路龍飛橋を通過した馬車は980輛、人力車は428輛、合計1408輛であった。すなわち毎分約4.1輛の馬車と1.8輛の人力車が通過したことになる(前掲『上海伝奇——文明嬾變的側影(1553-1949)』86, 199, 201頁)。
- *85 咸豊10(1860)年に太平天国の戦火を逃れて太倉直隸州崇明県に行き、そこに住んでいた時期を指すと考えられる。
- *86 戯曲の声調の一つで、「椰子(拍子木)」をたたいて調子を高めるのでこの名がある。
- *87 前掲『上海伝奇——文明嬾變的側影(1553-1949)』373頁。
- *88 一方、正妻の鄧夫人は「諸史や宋五子書を読むことを好んだが、吟詠だけは、女子のすることではないとして好まなかった」(前掲『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』7頁)。
- *89 字は菘卿、仁和人、光緒5年に昭文県の主簿代理であった(「昭文県の主簿〔昭文簿〕になった」(G5/3/20.1914)、前掲『重修常昭合志』(一)卷十九、「職官」30(1109))。「主簿」(正九品)は知県の佐助官で、県丞と糧馬・徵稅・戸籍・逮捕などを分掌したが、士人には雑職とみなされていた(前掲『清代典章制度辞典』187頁)。趙烈文とは以前から知り合いであった(T5/1/26.963)。
- *90 「催妝」とは、昔時、嫁取りの前日に婿の家から贈り物を持って嫁の家に行くことであり、その時に作って送る詩を催妝詩という。
- *91 この妹については詳しい記述はない。
- *92 この箇所には「女五」と記されているが、別の箇所に「女婉」と書かれている(G8/4/3.2068)。
- *93 これは、「銭塘湖」とも呼ばれる西湖のことであろう。
- *94 趙申喬の祠は故郷の常州(T4/1/28.859)のほか、任地であった杭州や長沙にも存在した。長沙の祠を訪ねたときの『日記』には、「たるきはゆがみ、軒瓦は欠けている。祠の香火を守っているのは王という地元の者で、毎月理問序で生息錢千数百文を受け取っているが、香火を供える費用に足りない。我が一族は後輩に人物がいないために、先人の名望と徳行は衰えようとしており、慚愧の念に堪えない」(X11/10/28.423)と書かれている。
- *95 胡光墉(1823-1885)、字・雪岩、安徽績溪人。左宗棠に協力して福州船政局を創設し、左宗棠が陝甘総督になったあとは、左宗棠のために上海で軍需を処理した。湘軍の勢力に依って、各省に質屋を開き、銀号を設けた。絹・茶・薬などの商売も手がけた。1844年に外国商人に締め出されて破産し、1885年に病死した(李盛平主編『中国近現代人名大辞典』中国国際広播出版社、1989年、504頁)。1884年は光緒10年である。胡光墉は、実際には、李鴻章と左宗棠の対立を背景とした「盛宣懐と胡雪岩の商戦」に敗れたのである(盛承懋『盛氏家族・蘇州・留園』文滙出版社、2016年、62-63頁)。
- *96 曾国荃はその後、宮中で拝謁するため光緒13年に2ヶ月ほど離任したのを除けば、光緒16年10月に亡くなるまでこの任にあった(前掲『清代職官年表』309, 1488-1491頁)。
- *97 王毓雯『清代文人蔣士銓とその戯曲研究』中国書店、2013年、101, 125頁。

- *98 老鉄「莫愁湖曾公坊之始末」『江蘇地方志』2018年第3号, 90頁。
- *99 黄彭年は光緒13年11月に陝西按察使から江蘇布政使となり, 光緒16年8月に湖北布政使となった(前掲『清代職官年表』1947-1950頁)。
- *100 南京工学院建築系劉敦楨『蘇州古典園林』中国建築工業出版社, 1979年, 58頁。
- *101 前掲『蘇州古典園林史』235, 242-243頁。
- *102 江蘇陽湖人, 盛宣懷の父, 道光24年進士, 『皇朝經世文統編』の編者である(孫文良・董守義主編『清史稿辭典』山東教育出版社, 2008年, 1706頁)。盛康の字は劫存, 号は旭人である(王偉『晚清第一官商: 盛宣懷の正面与背面』華中師範大学出版社, 2012年, 6頁)。
- *103 前掲『蘇州古典園林史』246頁。前掲『晚清第一官商: 盛宣懷の正面与背面』6頁。
- *104 前掲『蘇州古典園林史』247頁。
- *105 前掲『蘇州古典園林史』248頁。盛宣懷(1844-1916), 江蘇武進人, 字・杏蓀(幼勛, 荇生, 杏生), 号・次沂(愚斋, 補楼, 止叟), 李鴻章の洋務を助けた。郵伝部大臣などもつとめた(前掲『中国近現代人名大辞典』638頁)。
- *106 字・子山, 号・蔚如, 元和人, 道光21年進士, 官は寧紹台道に至った(前掲『清史稿辭典』2852頁)。前掲『明清進士題名碑録索引』2800頁)。
- *107 前掲『蘇州古典園林史』362頁。
- *108 前掲『蘇州古典園林史』369頁。
- *109 前掲『上海伝奇——文明嬾变的側影(1553-1949)』44頁参照。
- *110 前掲『上海伝奇——文明嬾变的側影(1553-1949)』367頁。
- *111 張叔和が和記洋行から買ったときは, 羅蘇文氏によれば21畝あまりであった(前掲『上海伝奇——文明嬾变的側影(1553-1949)』367頁)。
- *112 前掲『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』102頁。
- *113 趙烈文の誕生日は1月2日(旧曆)である(G7/1/2.2006)。
- *114 *The Chinese Gentry*, p. 97. 中国語版, 79頁。
- *115 前掲『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』7頁。
- *116 張惟驥撰, 蔣維喬增補, 朱雋点校『清代毗陵名人小伝稿』鳳凰出版社, 2017年, 198頁。この小伝には, 趙寛が「50歳を過ぎてから」諸生の身分で瞿鴻禨学使によって経済特科に推薦されたと書かれているが, 1863年生まれ趙寛が50歳を過ぎたときにはすでに中華民国の時代になっているので誤りであろう。没年の77歳というのも正確ではないかもしれない。経済特科の制度が作られたのは光緒23(1897)年だったが戊戌政変によって実行されず, 光緒27(1901)年になってから内外大臣に推挙するよう詔が下り, 光緒29(1903)年に試験が行われ, 一等9人, 二等18人が採用された(邱遠猷主編『中国近代官制詞典』北京図書館出版社, 1997年, 77頁)。瞿鴻禨(1850-1918)は光緒23-25(1897-1899)年には江蘇省の学政であり, 光緒27(1901)年には北京で工部や外務部などの尚書をつとめていた(前掲『清代職官年表』319, 2754-2755頁)。
- *117 前掲『常熟国家歴史文化名城詞典』170頁。趙烈文が直隸にいたころの『日記』に, 「同郷・盛稷孫(賛熙, 武進人, 県丞)」(T10/7/20.1425)という人が出てくるが, 静圃と盛氏との縁には, あるいは何らかの形でこの人も関わったかもしれない。
- *118 濮一乘編纂, 王継宗校注選訳『武進天寧寺志』常州歴史文献叢書第三輯, 鳳凰出版社, 2017年, 卷一・附本寺各処下院, 27頁。
- *119 前掲『晚清第一官商: 盛宣懷の正面与背面』289, 290頁。
- *120 金曾豪氏は, 趙園は「江南で一定の地位を有する」と評価している(前掲『常熟園林品読』21頁)。

History of the Zhao Family of Guanzhuang Village in Changzhou Prefecture (8)

Kaori Asanuma

8. The Private Life of Zhao Liewen as a Gentleman

After retiring from his official post and returning to Jiangsu Province, Zhao Liewen began his life afresh in a house he had previously purchased in Changshu District in Suzhou Prefecture. He enjoyed his easy retirement life to the full: he took trips to Hangzhou with his family; he satisfied his curiosity to view all that was new and contemporary in Shanghai; and he maintained mistresses who were gifted with both intelligence and beauty. However, Zhao Liewen's life was not free of care. He mourned the successive deaths of his brother and sisters, and he was grief-stricken especially at the demise of his eldest daughter who committed suicide in her twenties following her husband's death. Zhao Liewen was determined not to become entangled in matters related to officialdom. Thus, he did not accept any of the positions offered to him by his acquaintances like Huang Pengnian, who was delegated to Suzhou as the Provincial Administration Commissioner. Zhao Liewen did not intervene in lawsuits that would have brought him considerable amounts of rewards. With the absence of any other sources of income, his large family was financially dependent on the rent accrued from his moderate real estate. Moreover, Zhao Liewen spent large sums on landscaping of the garden at his residence. Although his garden still exists, to the delight of visitors, this expensive pursuit further deteriorated the economic conditions of his family.